
愛知県土地分類基本調査

伊良湖岬

5万分の1

国 土 調 査

1 9 8 7

ま え が き

本県では、限られた資源である県土を合理的かつ高度に利用していくため、県土の自然的条件を正確に把握することを目的として、昭和50年度から国土調査法に基づき、都道府県土地分類基本調査を国の補助を得て実施しております。

この調査は、国土地理院発行縮尺5万分の1地形図幅を単位として、土地の基本的な性格を規定している地形、表層地質、土壌等の自然的条件を科学的かつ体系的に明らかにし、地域の特性に応じた各種の土地利用計画の企画・立案のための基礎資料とするものであります。

これまでに、「岡崎」、「御油」、「半田」、「三河大野」、「足助」、「田口」、「佐久間」、「岐阜」、「美濃加茂」、「瀬戸」、「豊橋」、「田原」、「桑名」及び「名古屋南部」、「津島」及び「名古屋北部」の16図幅について調査、刊行してきました。

本年度は、昨年度に調査しました「伊良湖岬」図幅地域についてその成果をここに報告するものであります。

この調査成果が行政上はもちろん、各方面で広く活用されることを希望するとともに、調査の実施に当たって御協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

昭和62年3月

愛知県企画部長

山内千吉

調査担当一覧

指導	国土庁土地局 国土調査課	
総括	愛知県企画部 土地利用調整課	
地形分類調査	愛知県立大学 文学部	教授 岡田 篤 正
表層地質調査	名古屋大学 理学部	教授 糸魚川 淳 二
土 壤 調 査	愛知県農業総合試験場 愛知県林業試験場 愛知県農地林務部 林務課 愛知県東三河事務所 林務課 愛知県企画部 土地利用調整課	
その他関連調査 (土地利用状況)	名古屋大学 文学部	助手 北村 修 二

目 次

まえがき

総 論

I 位置及び行政区画

1 位 置 1

2 行政区画 1

II 地域の特性

1 自然的条件 3

(1) 地 勢 3

(2) 気 候 3

2 社会的条件 4

(1) 人 口 4

(2) 土地 利用 6

III 主要産業の概要

1 農 林 業 7

2 商 工 業 8

各 論

I 地形分類

1 地形概説 11

2 地形細説 16

II 表層地質

1 表層地質概説 28

2 表層地質細説 28

3 表層地質分類と開発及び保全との関連 38

III 土 壌

1 土 壌 概 説 44

2 土 壌 細 説 47

IV 土地利用現況 70

總

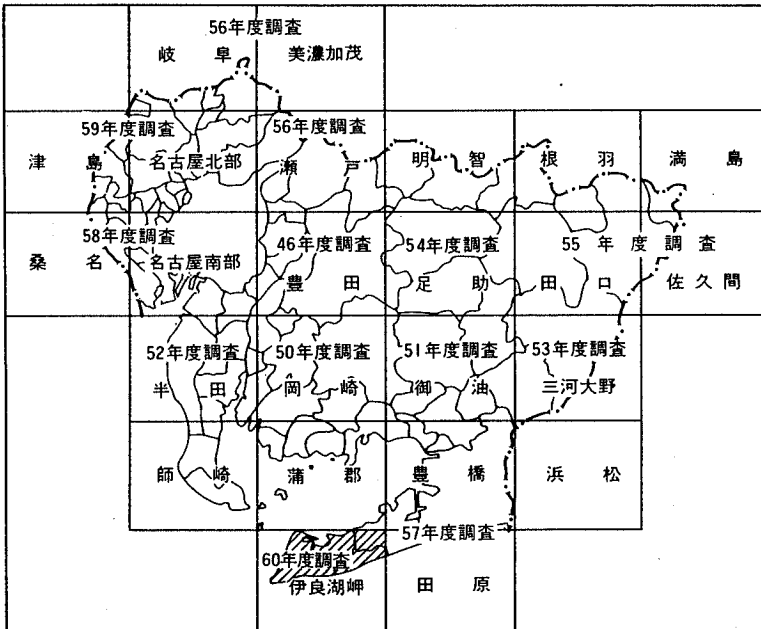
論

I 位置及び行政区画

1 位置

「伊良湖岬」図幅は、愛知県の南端に位置し、東経 137°00′～137°15′、北緯 34°30′～34°40′の範囲にあり、図幅の南半分は海面である。（第1図参照）

第1図 位置図



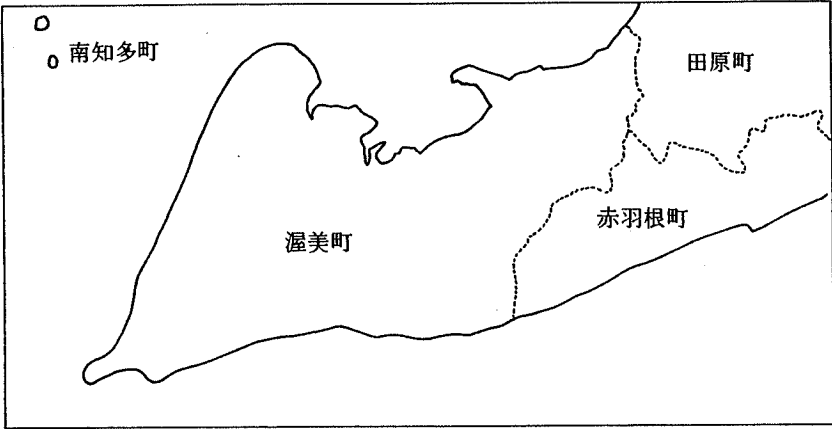
2 行政区画

本図幅の行政区画は第2図のとおりで、南知多町、田原町、赤羽根町、渥美町の4町からなっている。

本図幅内のこれら4町の面積及びその占有率は第1表に示すとおりである。

なお、総論においては、図幅内面積の多い田原町、赤羽根町、渥美町の3町について説明をすることとする。

第2図 行政区画



第1表 図幅内市町村別面積

市町村名	総面積	図幅内面積	図幅内	割合
	km ² A	km ² B	占有率%	B/A %
南知多町	30.01	0.17	0.1	0.6
田原町	82.36	23.74	18.4	28.8
赤羽根町	23.73	23.40	18.1	98.6
渥美町	81.88	81.88	63.4	100.0
計	217.98	129.19	100.0	59.3

- 資料 1) 各市町村の総面積は、建設省国土地理院「昭和60年全国都道府県市町村面積調（昭和60年10月1日現在）」による。
- 2) 各市町村の図幅内面積は、プランメーターにより5万分の1地形図を計測した数値である。

Ⅱ 地域の特性

1 自然的条件

(1) 地勢

この地域は、本県の最南部に位置し、渥美半島の主要部分を占めている。渥美半島は、東北東から西南西の方向に、長さ約34km、幅6～7kmの細長い形状を呈し、雄大な太平洋と、波静かな渥美湾に面している。

地勢についてみると、本図幅内では、赤石山系に属する山地とこの間を埋積する台地及び台地を切った低地よりなる。山地は中央部の最も高い大山(327.9m)と、北東端の滝頭山周辺の山地とに2分されている。台地は図幅南東部の田原町では渥美半島基部にまで連なる天白原台地が、また、半島中央部の丘陵地を境に太平洋側、渥美湾側の両方向に赤羽根台地が広がっている。半島先端部は三角州性低地の先に潮流の影響による幅約2km、長さ約9kmに達する大規模な砂州が形成されている。立馬崎から渥美湾側には大潟州の干がたが出来ており、採貝、養殖のり等に利用されている。

半島の太平洋岸は、隆起と海岸侵食の結果急斜面や崖を形成している。これらの崖は赤羽根では高さ約20m、小塩津では10m前後となっている。海岸線は極めて直線的で「片浜十三里」といわれる見事な砂浜が続いている。

(2) 気候

この地域は、典型的な太平洋岸型気候に該当し、温暖で、降水量も多い。

年平均気温は名古屋(15.3℃)とほぼ同程度ではあるが寒暖差は比較的少ない。冬期でも月別最低気温は氷点下を上回り、降霜日数も少ない。また、北西の季節風が強いが、暖流の影響で寒気は弱い。

このような気候条件を活かし、古くから電照菊が風土に適したものとして栽培されており、これが、渥美半島での施設園芸発展の基礎となっている。

(第2表参照)

第2表 気象記録

観測地点	月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年平均
	項目													
伊良湖	月別平均気温 (°C)	4.8	5.1	7.8	13.7	18.2	21.3	25.3	26.7	23.5	17.8	12.6	7.5	15.4
	月別最高気温 (°C)	8.3	9.0	12.2	17.8	22.2	24.7	28.8	30.6	27.1	21.6	16.4	11.1	19.2
	月別最低気温 (°C)	1.8	1.7	4.0	10.2	14.9	18.5	22.8	24.0	20.8	14.7	9.2	4.2	12.2
	月別降水量 (mm)	50.4	58.3	103.4	143.4	184.3	263.0	240.2	157.6	120.1	150.1	98.3	51.1	135.0

資料：愛知の気象(統) 1961～1970

2 社会的条件

(1) 人口

この地域は、多くが山地、丘陵により占められており、比較的規模の小さい市街地、集落が平地部に散在している。

人口の推移をみると、全体的には横ばいに推移している。昭和40年代には県人口は10%以上の増加率を示していたのに対し、当地域は0.3%の減少を示していた。50年代には、田原町の臨海部の造成地での工場立地の影響もあり、県人口増加率を上回る人口増加となっている。田原町以外では人口増減の変化も少なく、渥美町では55年～60年において再び人口減を示した。

通勤・通学による流出人口をみると50年には3町とも流出超過であったが、55年では田原町で流入超過となっている。

産業別就業人口についてみると、当地域は際立って第一次産業での就業比率が高い。特に赤羽根町、渥美町は50%を超え県内で最も高い。この地域は、露地野菜、施設園芸等が盛んであり、高生産性農業地域であり、農業が基幹産業の一つになっている。田原町は東三河の中心都市豊橋市に近く、また古くから城下町として、さらに近年では臨海部の企業立地もあり、産業三区分別の就業比率はほぼ均衡している。

第3表 人口・人口増加率の推移等

市町村	人 口					人 口 増 加 率				人 口 密 度
	40年	45年	50年	55年	60年	40~45	45~50	50~55	55~60	60年
田原町	26,546 ^人	25,425 ^人	26,268 ^人	28,884 ^人	32,677 ^人	△4.2%	3.3%	10.0%	13.1%	1,397 ^{人/㎡}
赤羽根町	6,696	6,411	6,302	6,411	6,562	△4.3	△1.7	1.7	2.4	277
渥美町	23,561	24,412	24,063	25,286	24,529	3.6	△1.4	5.1	△3.0	300
地域計	56,803	56,248	56,633	60,581	63,768	△1.0	0.7	7.0	5.3	339
県計	4,798,653	5,386,163	5,923,569	6,221,638	6,455,121	12.2	10.0	5.0	3.8	1,257

資料：国勢調査

第4表 産業別就業人口

単位：人、%

市町村	就 業 者 数								構 成 比					
	55年				45年				55年			45年		
	総数	第1次	第2次	第3次	総数	第1次	第2次	第3次	第1次	第2次	第3次	第1次	第2次	第3次
田原町	15900	5236	4923	5741	14325	6210	3611	4504	329	31.0	36.1	43.4	25.2	31.4
赤羽根町	3846	2564	390	892	3610	2534	354	722	66.7	10.1	23.2	70.2	9.8	20.0
渥美町	15015	7865	2402	4746	14040	8169	1987	3882	52.4	16.0	31.6	58.2	14.2	27.6
地域計	34761	15665	7715	11379	31975	16913	5952	9108	45.1	22.2	32.7	52.9	18.6	28.5
県計	3048896	166269	1292074	1590553	2814623	282807	1298275	1233541	5.5	42.4	52.2	10.1	46.1	43.8

資料：国勢調査

(2) 土地利用

この地域の土地利用全体をみると農用地が38%を占めており、県平均の2倍にあたる。農用地の多くが畑作利用されており、太平洋岸の渥美町、赤羽根町では施設園芸が盛んである。

宅地については、渥美町、赤羽根町は、県平均の半分以下である。田原町は市街地及び臨海工業用地もあって、比較的多いが、県平均には及んでいない。なお、田原町の臨海部造成地は、当図幅外の北東の位置にある。

森林の大半は雑木林で山地にまとまってあるほか、丘陵部、海岸線等に散在する。半島西端の広大な砂州に沿っては、幅500mの飛砂防備機能をもった松林が続いている。

第5表 地目別土地利用(59年)

市町村名	行政面積 (ha)	農用地		森林		宅地		その他	
		(ha)	構成比(%)	(ha)	構成比(%)	(ha)	構成比(%)	(ha)	構成比(%)
田原町	8,236	2,679	32.5	2,185	26.5	952	11.6	2,420	29.4
赤羽根町	2,373	1,046	44.1	671	28.3	144	6.1	512	21.6
渥美町	8,188	3,432	41.9	2,737	33.4	475	5.8	1,544	18.9
地域計	18,797	7,157	38.1	5,593	29.8	1,571	8.4	4,476	23.8
県計	513,634	96,682	18.8	225,880	44.0	68,826	13.4	122,246	23.8

資料：土地に関する統計年報（愛知県企画部）

Ⅲ 主要産業の概要

1 農林業

この地域の農業的土地利用については、広範な洪積台地は地質的に酸性が強く、有機質に乏しいが畑地として利用されている。昭和43年の豊川用水の通水により、水不足も解消され、農業に対する旺盛な意欲、各種農業基盤整備事業により露地野菜、施設園芸などの農業が高度に発展し、全国有数の高生産性農業が展開されている。

この地域の農業粗生産額は県下の15.3%を占めている。農業粗生産額の内訳である耕種・畜産比率をみると、渥美町はキャベツ等の野菜栽培が盛んで耕種比率が高い。田原町は養豚を中心とする畜産が盛んで、畜産比率が半ばを占めている。赤羽根町は花きのウエイトが最も高いものの、耕種・畜産比率は県平均とほぼ同程度である。（第6表参照）

この地域の農業は、京浜、阪神、中京等への高速道路を利用した輸送面での優位性に恵まれていたが、近年の道路網等の発達により、農産物の産地間競争が激化しており、その対応に迫られている。

第6表 農業粗生産額（59年）

単位：上段 百万円
下段 %

市町村名	農生 業産 粗額	耕 種					畜 産					加農 産 工物	
		計	米	野 菜	花 き	そ 他	計	畜 肉 用 牛	乳 用 牛	豚	鶏		そ 他
田 原 町	22,105	10,133	976	6,378	1,762	1,017	11,843	1,384	1,437	6,138	2,518	366	129
	100.0	45.8	4.4	28.9	8.0	4.6	53.6	6.3	6.5	27.8	11.4	1.7	0.6
赤羽根町	11,604	7,765	284	2,809	4,641	31	3,839	874	453	1,980	532	0	0
	100.0	66.9	2.4	24.2	40.0	0.3	33.1	7.5	3.9	17.1	4.6	0.0	0.0
渥 美 町	22,853	17,961	674	11,674	5,243	370	4,891	976	1,935	1,758	185	37	1
	100.0	78.6	2.9	51.1	22.9	1.6	21.4	4.3	8.5	7.7	0.8	0.2	0.0
地 域 計	56,562	35,859	1,934	20,861	11,646	1,418	20,573	3,234	3,825	9,876	3,235	403	130
	100.0	63.4	3.4	36.9	20.6	2.5	36.4	5.7	6.8	17.5	5.7	0.7	0.2
県 計	368,610	245,135	66,670	114,179	30,586	33,700	121,949	10,433	28,493	39,399	39,434	4,190	1,380
	100.0	66.4	18.1	30.9	8.3	9.1	33.1	2.8	7.7	10.7	10.7	1.1	0.4

資料：第32次愛知農林水産統計年報（東海農政局）

2 商工業

(1) 商業

この地域は広域的にみると、豊橋市の商業圏域に含まれ、機能的に卸売業が少なく、商品販売額に対する小売業比率は半ばを占めている。

このため、商品規模を示す1店当たり従業員数、従業員1人当たり商品販売額も県平均に比べ小規模である。(第7表参照)

町別に地元購売率をみると、贈答品を除く買回り品、最寄品等は田原町、渥美町は70%を超えているものの、赤羽根町の商業は、飲食料品を中心とする最寄品の小売業が主力であるため、田原町への依存度(48.3%)が地元購売率(32.3%)を上回っている。

近年の自家用車普及による店舗の市街地周辺への立地が進み、この地域での田原町の商圏域の中心性が高くなっている。

第7表 商品販売額等

	商品販売額(除飲食店)			60年			
	51年	60年	うち小売業比率	商店数	従業員数	商店1店当たり従業員数	従業員1人当たり商品販売額
	千円	千円	%	店	人	人	万円
田原町	1,704	5,505	52.6	472	1,693	3.59	3,252
赤羽根町	133	319	83.0	76	235	3.09	1,357
渥美町	1,182	2,928	51.9	419	1,285	3.07	2,279
地域計	3,019	8,752	53.5	967	3,213	3.32	2,724
県計	2,221,709	4,387,567	13.1	110,685	624,810	5.64	7,022

資料：商業統計調査

(2) 工業

この地域における昭和49年から59年までの製造品出荷額等の伸びは、県平均に比べて飛躍的な伸びを示している。

この急増は田原町での臨海工業用地での企業立地によるものである。臨海部

での企業立地は昭和48年以降であるが、特に54年に操業を開始した大規模な自動車製造工場の影響は大である。

臨海部を除くこの地域では、地場産業としての食料品、繊維工業等の中小・零細企業がわずかに散在している（第8表参照）。

第8表 製造品出荷額等

単位：億円、%

市町村名	49年		59年		59年/49年
	製造品 出荷額等	対県シェア	製造品 出荷額等	対県シェア	
田原町	254	0.2	5,710	2.2	22.48
赤羽根町	15	0.0	39	0.0	2.60
渥美町	75	0.1	88	0.0	1.17
地域計	344	0.3	5,837	2.3	16.97
県計	113,367	100.0	256,703	100.0	2.26

資料：愛知の工業（愛知県企画部）

注：従業者4人以上の事業所

(3) 観光

この地域は、三河湾国定公園、県立自然公園に指定され、恋路ヶ浜、日出の石門等の景勝地や多くの史跡に恵まれ、県下有数の海洋性レクリエーション地域として多くの観光客が訪れている。

伊良湖海水浴場は知多半島の内海海水浴場に次ぐ規模で、利用者は年間30万人を超えている。

渥美半島では各種観光施設も整備充実されているが、鳥羽・南知多方面とも結びついた広域的な海洋性観光・レクリエーションゾーンとして、一層の整備が求められている。

各論

I 地形分類

1 地形概説

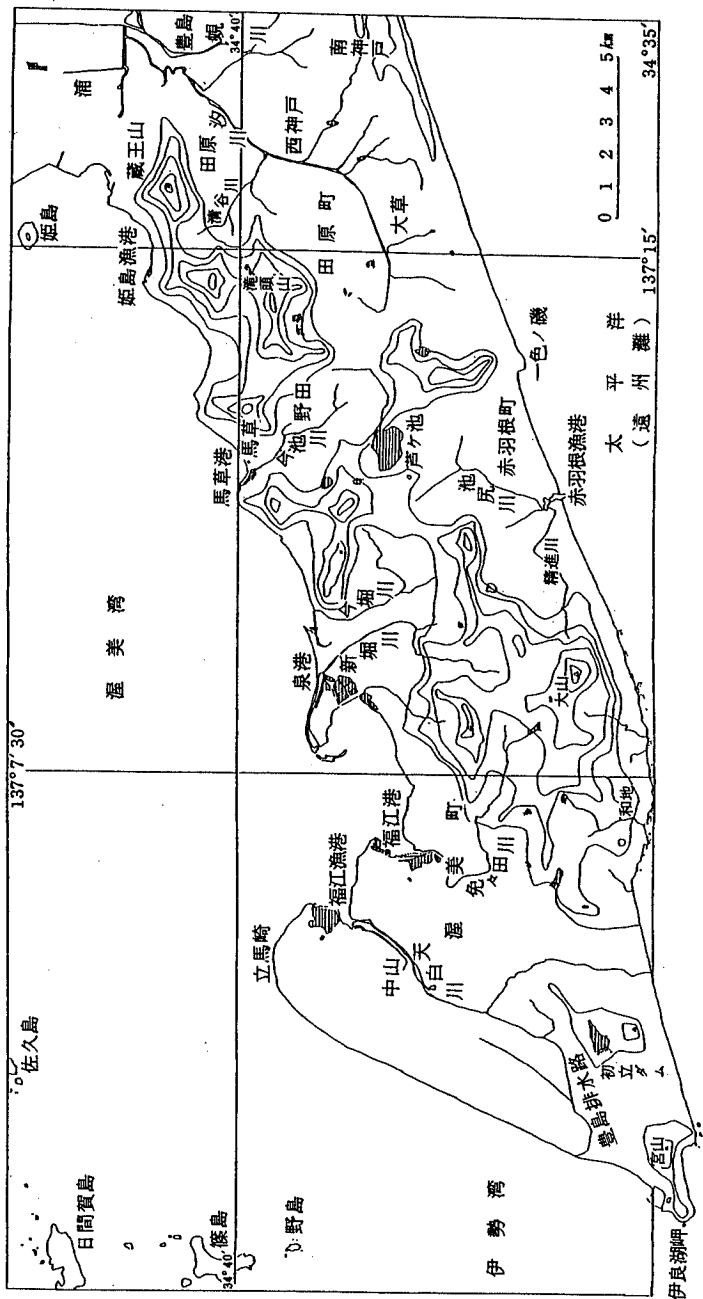
本図幅のほとんどは渥美半島であり、山地・台地（段丘）・低地が複雑に入り込んで分布する。全体として地形の起伏は少なく、台地や低地の占める割合が相対的に多く、また、愛知県最南部の全般的に気候温暖な場所でもあるので、農業や工業、観光や漁業などが主要産業として発達する地域となっている。なお、全体の概形は第1図の接峰面図や写真1によく表現されている。

地体構造の上で、西南日本を北西と南東側に二分して縦走する中央構造線は豊川河谷に沿って南西方向に走り、さらに三河（渥美）湾の南部を通過している（山田ほか、1984）。この付近では厚い新期の堆積層下に埋没しているので、あまり詳しい位置は判っていない。

中央構造線の南東側は外帯とよばれ、当域のほとんどはこの外帯に属しているが、図幅北西隅にある野島と篠島は北西側の内帯に属する。

渥美半島の山地は、弓張山地の延長部であり（岡田、1984）、主に古生代末期ないし中生代初期の秩父系に属する珪岩（チャート）や粘板岩・砂岩より構成される。これらには局部的に石灰岩・輝緑凝灰岩などの堆積岩起源の岩石やかんらん岩および蛇紋岩、斑れい岩および輝緑岩などの（超）塩基性の貫入岩がみられる。これらはほぼ東西方向に延長し、推定断層と共に外帯基盤山地の構造方向をよく表現している。

これらの山地は、数個の塊状の孤立山地として分散してみられる（写真2）が、最高峰は大山（327.9m）、次いで雨乞山南方の山頂（275.2m）・滝頭山（258m）などであり、標高はさほど大きくない（第1図）。しかしながら、山地斜面は比較的堅硬な岩石よりなるのでかなり急傾斜であるが、地すべりや崩壊地などは少なく、密な植生によっても保護されているために比較的安定しているといえよう。一方、山麓部には崖錐・麓屑面・（小）扇状地などの緩傾斜面がかなりみられるところもある（写真3参照）ので、山地から物質移動もかなりあることを示唆している。しかし、その山麓堆積物は全般的によく



第1図 渥美半島の接峰面図と主な河川名・地名
 2.5万分の1地形図を使用した埋谷(幅750 m)接峰面図、等高線間隔は50m

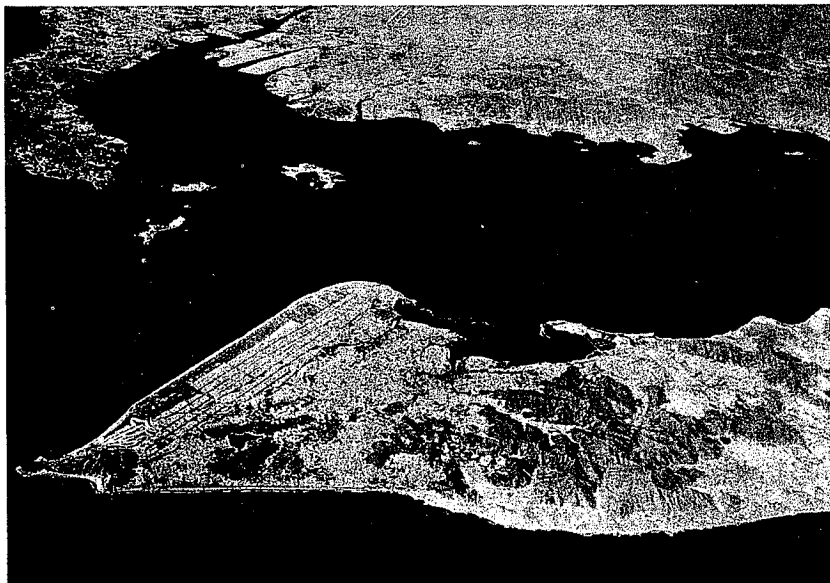


写真1 渥美半島付近の斜め航空写真
高度13,000 m付近よりみた渥美半島と周辺域
©朝日新聞社 1977年



写真2 渥美町伊良湖～堀切付近の山地・台地・低地の地形
伊良湖ビューホテル付近より東望。右は遠州灘。

風化していることが多く、更新世における物質移動は活発であったが、完新世（＝約1万年前）以降においては、気候の温暖化に伴う植被の保護によって、山地斜面からの物質はほとんどないようである。

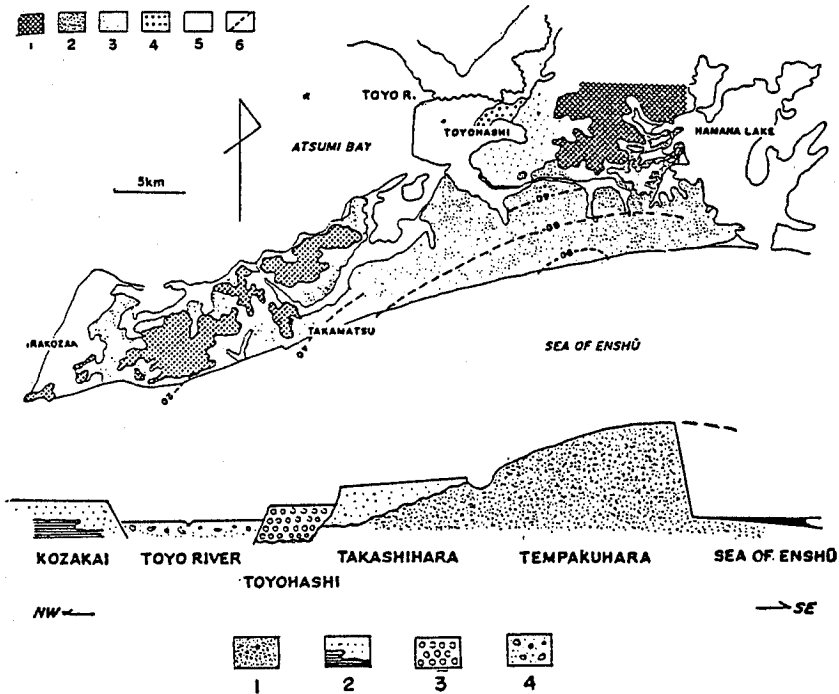
上記の山地塊ないし山地群を除くと、渥美半島は渥美層群とよばれる中～古期更新統や段丘堆積層および沖積層などの第四紀層から構成される。

渥美累層の最上位には、層厚3～6mの天伯原礫層がみられ、この堆積面は天伯原面あるいは天伯原台地とよばれている。天伯原面は半島基部の南側（太平洋岸の湖西市白須賀町～豊橋市東細谷町付近）でもっとも高く、標高約80mに達しているが、北側および渥美半島の西側に向って徐々に高度を下げ、いわゆる渥美曲隆地形を形成している（第2図）。この天伯原面はいくつかの段丘面が複合した台地で、主に高位段丘面と上位段丘面が卓越しているが、前者は中心部にのみみられ、後者が周辺の大部分を形成している（国土地理院、1968、73、岡田、1984）。後者の上位段丘面は当図幅の太平洋岸と一部の山麓にみられる。



写真3 田原町大久保南方の山地と山麓緩斜面・麓層面
手前の水田部分は汐川上流域の谷底平野。田原町大久保西部より南方を望む。

当域でもっとも広く発達する段丘面は中位段丘面とした福江面であり、豊橋・田原幅の高師原面に対比されている（国土地理院、1968、73、井関、1980、岡田、1980）。この段丘面はほとんどの場所で海成段丘面として形成され、前述の渥美曲隆運動の影響を受けており、当図幅東部で旧汀線高度が約30mであるのに対し、伊良湖岬付近では10m以下、福江付近でも十数mである（石川・太田、1967）。この段丘面は最終間氷期の最盛期（約12年前頃）かそれ以降の高海水準期に形成されたものであろう。



第2図 渥美半島の地質図と地形・地質断面図（土降-1960による）

上：地質図 1：古生層 2：渥美累層 3：高師原礫層
4：豊橋礫層 5：沖積層 6：渥美累層堆積面
の等高線(m)

下：地形・地質断面図 1：渥美半島と天伯原面 2：高師原礫層
と高師原面・小坂井面 3：豊橋礫層と豊橋面
4：沖積層と沖積平野面

赤羽根町池尻・渥美町村松付近には、中位段丘面より10 m程低い下位段丘面が局所的に分布している。当域ではこれは河成段丘面として形成されたとみなされる。

渥美半島の低地を構成する沖積面は、主に台地ないし段丘を開析した幅狭い谷底平地、渥美湾に面した今池川・今堀川～新堀川・免々田川・天白川などの最下流部に発達する三角州と砂（礫）堆～砂（礫）州、半島先端部の中山砂礫堆（＝西山砂嘴）などである。また、渥美湾岸の湾入部には、干拓地や養魚池がかなりあり、福江湾には砂嘴や干潟が広く分布している。

なお、当域の地形は2万5千分の1土地条件図「伊良湖岬」（国土地理院、1972）、この成果に沿岸海底の調査を書き加えたものとして、2万5千分の1沿岸海域土地条件図「伊良湖岬」および同報告書（1973～74）が刊行されており、より詳しい縮尺の地図で地形分類がなされている。したがって、さらに詳細な土地条件の検討には、これらの調査成果物を参考にされたい。

2 地形細説

2.1 渥美半島山地

この半島にある山地の地質は赤石山脈の南西延長部である弓張山地のさらに南西への延長連続部から構成されている。中央構造線より南東側の外帯であり（山田ほか、1984）、大部分は秩父系の珪岩（チャート）および粘板岩・砂岩よりなるが、石灰岩や輝緑凝灰岩、さらに橄欖岩^{かんらん}および蛇紋岩が局部的に山地の北側にみられる。これらの地質や推定断層は東西ないし東北東－西南西方向に延長し、しかも大きな変形を受けて層理面はほとんど直立しているようである（愛知県、1979）。

半島部における最高峰は大山（327.9 m）であり、次いで雨乞山の南西方山地（275.2 m）、滝頭山（258 m）の順である。これらの山地は段丘面ないし沖積面を隔だてて、6つの山地塊に分けられるが、さらに小さな山地や多数の岩礁も付随して周辺に点在する。これらのうち、もっとも大きい山地塊は雨乞山－大山々塊であり、次いで東隣の田原・豊橋図幅（岡田、1984）

から続いてくる蔵王山－衣笠山－滝頭山々塊である。

これらの山地塊は晩壯年期状の山貌を呈し、稜線高度は起伏に富み、山頂部に小起伏面や緩傾斜面は認められない。稜線は複雑に枝分かれし、その間に谷底平野が樹枝状に入り込んでいる。こうした山地の地形的特徴からみると、山地塊が長期に亘って開析を受けた後に、第三紀から第四紀前期にかけて沈水していたが、段丘が河間地にあたる場所に発達しているように、第四紀後期では逆に曲隆して半島の概形が形成されたとみなすことができる。

国土地理院(1972～74)による土地条件図の判読によると、当域の山地は一般に稜線に沿う尾根型急斜面が細長く延び、山地斜面は全般に急斜であるが、河谷ないし沢沿いに谷型の急斜面がみられる。稜線ないしその直下の山地斜面に壁岩ないし露岩がかなりみられるが、崩壊地や地這りはほとんど認められず、山地斜面は比較的安定した状態にあるといえる。これは秩父系の硬岩の安定角と密な植被によると考えられる。

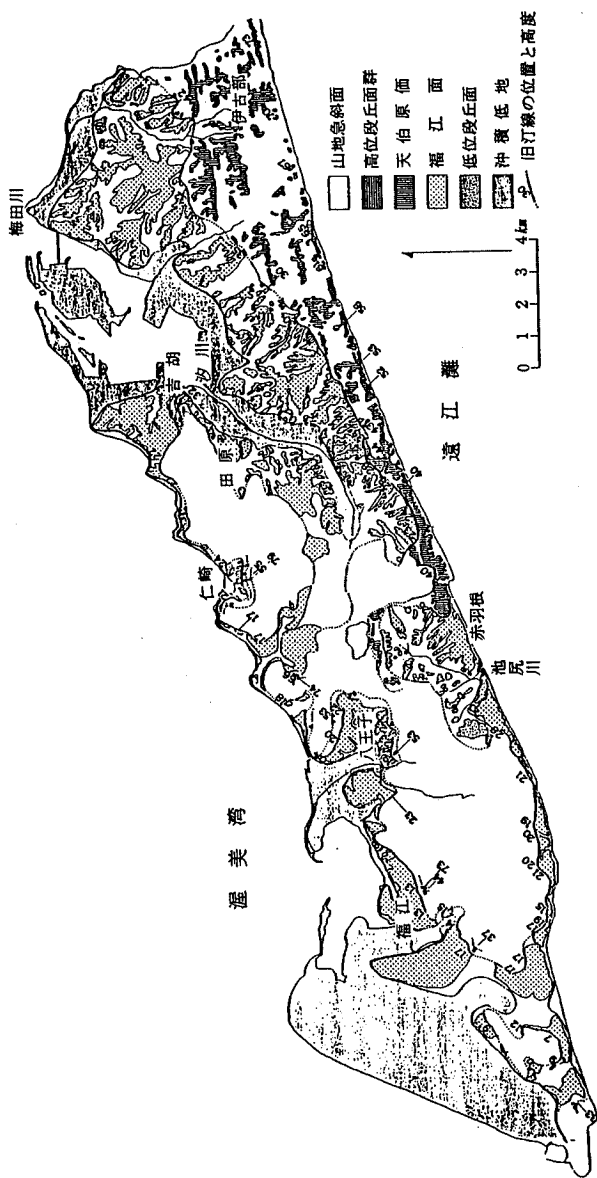
しかしながら、かなりの山麓部に沿って崖錐～麓層面・(土石流)・扇状地などの堆積地形がみられる。これらの幅は比較的狭く、全般に古い形成時代のものが多い(写真3参照)。しかし、局部的には最新地質時代である完新世にまで形成されてきた所がある。通常の降雨時にはさして問題もないが、時折おそわれる集中豪雨時には、異常出水と共に土石流の危険もあるので、そうした場所での土地利用には注意を要する。

また、当域には各所に採石場があるが、今後こうした地域の土地再利用や、さらに新たに山地を切り取り、前面を盛土するような場合には、背後切り取り部からの崩壊や盛土部の亀裂・崩れなどが、集中豪雨や大地震時などのような異常事態に想定されるので、こうした可能性をも考慮して土地開発は行われるべきであろう。

2.2.1 渥美半島台地・段丘

当域の台地・段丘は東隣の天伯原台地からの連続である。渥美半島部の台地は豊橋市伊古部町を曲隆の頂点とする渥美曲隆運動の影響を受けて、東南部の

海拔高度が高く、高位の段丘面がみられるが、北ないし西部に低くなり低位の段丘面がより広く分布するようになる（第1・3図）。



第3図 渥美半島の段丘面～低地と旧汀線の高度（石川・太田 1967による）

台地ないし段丘面は3段に分けられ、上位段丘面は太平洋岸と山麓の一部にみられるが、中位段丘(=福江)面はその北側に広く分布し、当域で最も卓越する海成段丘面である。上位・中位段丘面が海底の浸食および堆積作用で形成される余時には、山地域は海面上に散在する諸島であった。

低位段丘面は河谷沿いに局部的に分布するのみである。これらの段丘面は周辺低地より数~10数m高いので、洪水の影響を受けることはまずない。地盤条件もかなり良いので、古くから多くの集落が立地し、主な交通路が敷設されてきた。しかし、台地であるため、用水の確保が相対的に困難であったが、愛知用水の建設以後はそれもかなり改善されて、集約的な土地利用が行われるようになった。

ところで渥美半島の台地・段丘は上下に細分されるものの、ほぼ連続的に分布し、これらを平面的に分けることができないので、次に一括して述べることにする。

上位段丘面は天伯原面(黒田・1958、土・1960、貝塚・1961)に対比されるが、天伯原面は上・下2段に細分され、当図幅内のものはその下位に相当する。赤羽根町高松付近から渥美町土田にかけて太平洋岸に細長く分布し、さらに田原町芦ヶ池の南側や渥美町小塩津・一色・日出付近の山麓部に局部的に発達する。

中位段丘面は上位(=天伯原下位)段丘面の下位にあり、堆積原面がもっとも広く保存されている台地である。福江面(黒田・1966、石川・太田・1967)ともよばれ、山地や上位段丘面を取巻いて分布している(写真4参照)。この旧対線高度は図幅東部で約30m、西部で10m弱であり、西方へ高度を大きく減少させるが、同時に遠州灘より渥美湾側がわずかに低くなっている(石川・太田・1967)。上位段丘面や沖積低地面との比高も東部で大きく、西部ではほとんど高度差がなくなってくる。

この中位段丘面を構成する礫層は海成であり、その層厚は1~10m強と場所によってかなり異なる。しかし一般的に渥美湾岸の入江状の湾入した部分で厚く、遠州灘側やかつての岬部分で薄くなる傾向が認められる。

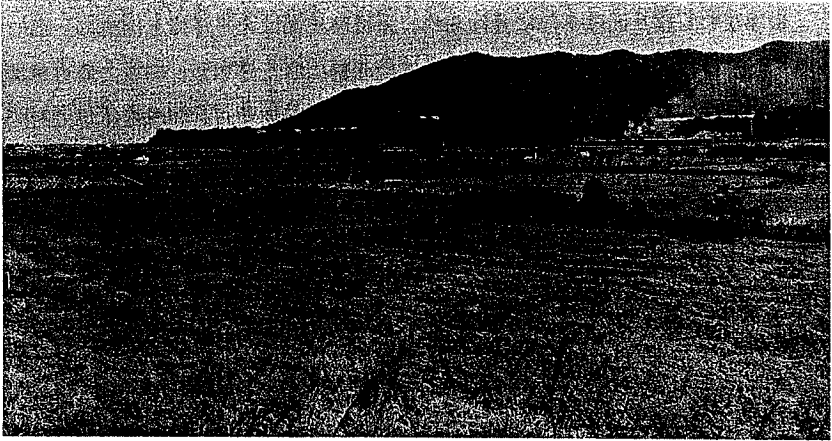


写真4 渥美町江比間付近の山地・台地・低地
渥美町八王子付近より北望。遠景は古生層からなる渥美半島山地、中景は中位段丘とその前階段丘崖、近景は今堀川の低地。

この礫層は径約3～5 cm前後のよく水磨された古生層の礫からなり、概して上位段丘礫層より粗粒である。しかし、山地の周辺ではやや角ばった礫を混じえている。また、土壌層は上位段丘面を被覆する赤色土よりも厚さや赤味が薄く、相対的に新しい形成時代であることを示唆する。

石川・太田(1967)は地形や地質からみて、上位段丘(=天伯原)面形成時の海進と沖積世海進の間に位置する海進期、すなわち最終間氷期における最高水準期(約12～13万年前)のいわゆる下末吉面に対比している。この研究以後では、一般にこの時期の海成段丘面も数段に細分されるのが普通であるので、最終間氷期のある時期に形成されたことは全く問題がないとしても、形成時代については詳しい調査に基く再検討を必要とする。

当域の段丘面は赤羽根町池尻、渥美町村松～馬状および石神付近に局部的に分布する。これらの場所はほとんど河谷沿いであり、下流側に標高を減少する。また、全般に層厚1 m前後の薄い河成礫からなるので、中位段丘面形成以後の海退時に離水した河成面であると推定される。

太平洋(遠州灘)に面する段丘面の南側は現成の海食崖で限られている。当

図幅の西部では比高 5 m 弱、東部では約 30 m である。この海食崖は第四紀の渥美層群や段丘礫層といった相対的に軟弱な地層で構成されているため、海岸浸食や谷頭浸食が著しく、現在でも海食崖は後退している(写真5)。庄子士郎編(1978)は過去30年間に $30\sim 60\text{ m}$ ($1\sim 2\text{ m}/\text{年}$)、池田芳雄(1985)は1年間に平均 1 m も後退してきたと述べている。このような激しい海岸浸食に対して、現在では各地に消波用のコンクリートブロックや防波堤が築かれている(写真5)。こうした護岸工事対策も数十年以内程度でおそろ台風や津波などの海岸浸食に対しては有効であるが、それより長い間隔で時たまおそろ大規模の台風や大地震に伴う津波等にはまだ充分なものとは思われない。

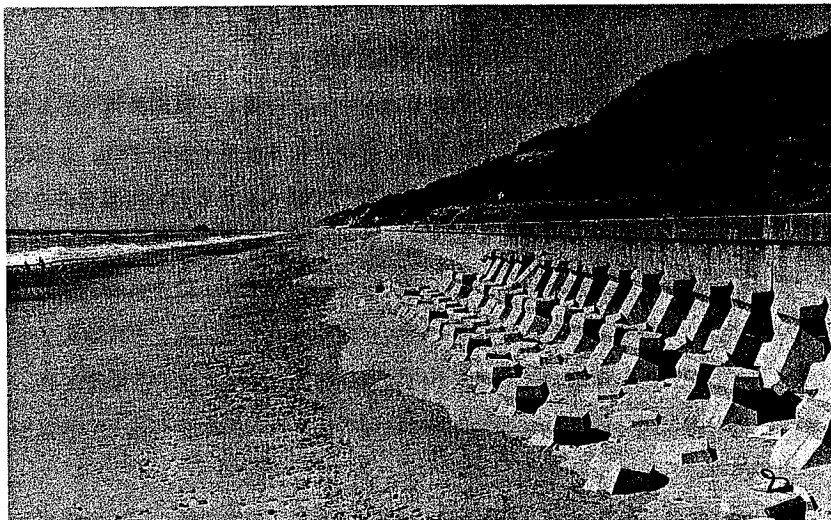


写真5 渥美半島表浜の海食崖・防波堤・海岸の状況
赤羽根町高松南方の海岸より西方を望む。

2.2.2 渥美湾島嶼

三河湾に分布する島嶼の一部が図幅の北西部にみられる。篠島と野島であり、基盤岩石は両島共に石英閃緑岩で構成されている。両島とも中位段丘面に相当する隆起海食台であり、全体に平坦な標高 $20\sim 30\text{ m}$ 強の海成段丘面となっ

ている。野島の周田は現成の海食崖で取囲まれているが、篠島は海食崖の部分と砂浜海岸とが交錯する。砂浜海岸は夏には海水浴場として利用されている。

2.3 渥美半島低地

渥美半島部にみられる低地は山地や台地を開析して流れる各河川沿いに細長く分枝する。その主な低地は東から汐川中流部、今池川、今堀川と池尻川（両河川の上流部は低地の谷中分水界として連続している）、免々田川などに沿うものである。

これら以外にも、幅百 m 以内の低地がさらに小規模の河谷沿いにみられ、急勾配な谷底から緩勾配へと移行している。こうした低地は集中豪雨などには氾濫の可能性がより高い地帯であるが、ほとんど水田として利用されているので、現在までのところ土地利用上の大きな問題は起きていない。

半島西端部には、幅 2 km 強・長さ約 9 km の中山砂礫堆（＝西山砂嘴）があり、この東側の中段段丘面との間には、細長く延びる後背湿地や海岸平野、さらに干拓地がみられる。この場所の低地が当図幅内ではもっとも広い面積を占めている。これら低地について主に東から西にもう少し詳しく次に述べる。

図幅の東端部には、汐川流域の最上流部域をなす低地が中段段丘面を開析して分布する。流域面積の割には幅広い谷底平野であり、段丘面との比高も 10 m 以下と小さい。この低地を構成する河成の沖積層の厚さも薄いと推定され、砂州などの段丘面上にみられる微高地で取囲まれた浅い凹地を起源とするように思われる。

図幅の北東部には、今池川の低地があり、上流部は皿状の浅く広い小凹地となっているが、中流部は狭長な谷底平野である。川口付近に狭い三角州や海岸平野がみられる。

渥美町東部の今堀川と新堀川およびその西方の低地は、上流側が谷底平野で（写真 6）、下流側は海岸平野と三角州である。江比間や佐川津の集落は砂州の上に立地している。さらに、渥美湾側の三角州には養魚池が多くみられ、各種の栽培漁業が行われている。



写真6 渥美町長沢～山田付近の山地と谷底平野
渥美町役場付近より南望。

赤羽根町の池尻川流域は上位～中位段丘面を開析する幅狭い谷底平野であり、樹枝状の平面分布形態を示す。この最上流部は今堀川と谷中分水界で接しており、小規模な河川の争奪ないし変更があったことを示唆している。

渥美町の中にある免々田川流域は、上流部は基盤山地内を流下する幅狭い谷底平野であるが、下流部は海岸平野・砂州・干拓地などである。福江や向山の集落が立地している所はほとんど砂州の上であり、低地としては相対的に高乾な場所である。

なお、福江湾内には広大な干潟が広がり、湾の出口には西側から大潟洲が、東側から鎗崎の湾口砂嘴が延びて来て、湾をほとんど閉じるような形態になっている。

半島の西端部には中山砂礫堆あるいは西ノ浜砂嘴とよばれる完新世に形成された砂浜や砂丘列があり、広大な農業用地として利用されている。この北部には中部電力の渥美火力発電所があり、南部には国民休暇村・シーサイドゴルフ場・伊良湖港などの人工改変地もみられる。

これらの砂礫堆の形成には、沿岸流による表浜（＝遠州灘）からの浸食・運搬物質の搬入が考えられ、さらに、伊良湖水道の激しい潮流の浸食やこれに伴う側堆積も受けているようである（井関・1980）。山田ほか（1984）のボーリング調査結果によれば、地表下約25mまでが砂礫層であり、以深の-60m付近までが細粒砂層で構成されている。火力発電所付近では、-60

～9.5 mがシルト～粘土層で、以深は中央構造線に沿う圧砕岩（マイロナイト）の基盤岩石に達している。

なお、この低地には風や飛砂を防ぐために、道路沿いに防風林が植えてあり、乾期には豊川用水の末端である初立池から配水を受け、雨期には豊島排水路によって過剰の降水は排水されている。また、この東隣にある天白川や梅藪から中山に沿う低地は砂礫堆背後の後背湿地や海岸平野であり、それらの下流部は埋立て地という低湿で軟弱な地盤より構成されている。

2.4 土地（地形）条件と災害

当図幅内の山地は晩壮年期状の山形を呈し、かなり急傾斜面も一部で見られるが、崩壊や地切りはほとんどみられないので、相対的には安定勾配に近い山地であるといえよう。山稜部や尾根末端には露岩もかなりみられるが、崩落の危険は比較的少ない。

山麓部には崖錐や扇状地がかなりみられるが、全般に古い形成時代のものが多い。しかし、一部の河谷出口付近には新期の（土石流）扇状地が分布する所もあり、こうした場所の土地利用には注意を必要とする。

台地・段丘面上は洪水の危険もなく、地盤も比較的堅いので、一般にもっとも安全な生活舞台といえよう。

しかし、山地や台地を切り取った背後の急斜面や前面の盛土部分は洪水や地震時に不安定であるので、注意が必要である。とくに段丘崖付近の建造物は浸食や崩壊の危険性が大きいので、こうした事柄を十分に銘記すべきである。

沖積低地は洪水の危険のもっとも大きい場所である。当域の中～上流部ではほとんど水田として利用されているので、人的被害は少ないと思われる。しかし、下流部はもともと低湿地であり、堤防や盛土などの人工的改良によって整備された土地であるが、その後の地盤沈下や人工物の老朽化も生じている。完璧な災害対策は不可能と思われるので、こうした災害危険予想地域では関係当局や住民の日頃からの対策が要請される。

このほかの主な災害としては地震・地盤被害・津波などによるものがあるの

で、これについて概述しておく。

当図幅内を震央とする被害地震は歴史時代に発生しておらず、またいわゆる直下型大地震を引起す活断層を知られていない(岡田、1979)。渥美湾北側には、昭和20(1945)年の三河地震を引起した深溝断層と横須賀断層があるが、これは活動間隔がきわめて長い(約1万年)ので近い将来これが再活動する可能性はないといえる。また、別の推定活断層も中央構造線以北にはあるが、局地的被害地震を起すと思われるので、これが当域に大きな被害を与えることはないであろう。渥美半島の地盤は古生層の山地や更新世の段丘が広く発達しているので、こうした地域は太平洋側で起る巨大地震に対しても一般的には地震工学的には良好な地盤である。

ところで、現在もっとも注目されている駿河湾を震央とするいわゆる東海地震が発生した場合には、当地は震度5~6が予想され、遠州灘の津波災害(飯田、1981ほか)、沖積低地の地盤沈下や液状化現象、低地前面の堤防決壊に伴う湛水災害、台地(とくに崖端部)や山地(とくに造成地の末端部)の崩壊が予想される。

とりわけ、遠州灘に面した砂浜海岸と赤羽根町池尻および渥美町堀切・小塩津付近の低地、および渥美湾岸の低地では数m強の波高をもった津波の来襲が予想される(飯田、1981ほか)。また、沖積層の厚い低地で、とくに三角州や海岸平野となっている場所では、津波の他に地盤沈下や液状化による災害が危惧される。こうした災害予想地域では日頃からの対策が望まれる。

引用・参考文献

(あいうえお順)

- 愛知県環境部(1979):愛知県環境利用適性調査、第一分冊(地質図)、
1/5万 (Ge-04)、愛知県
- 飯田汲事(1979):明応地震・天正地震・宝永地震・安政地震の震害と震
度分布、愛知県防災会議地震部会、109P.
- 飯田汲事(1981):愛知県被害津波史、愛知県防災会議地震部会、119P.
- 池田芳雄(1985):大地は語る、広栄社 211P.
- 石川佳代・太田陽子(1967):渥美曲隆運動に関する若干の資料、第四紀
研究、6、89~92.
- 井関弘太郎(1969):愛知県総説——自然・地形——、日本地誌、12(愛
知県・岐阜県)、22~33、二宮書店、603P.
- 井関弘太郎(1980)、愛知県の地質・地盤(その1):地形・地質・地盤
の概況、43P.
- 井関弘太郎(1980):沖積層の分布と液状化現象 愛知県の地質・地盤(
その3) 愛知県防災会議地震部会、78P. +付図3
- 岡田篤正(1979):愛知県と周辺地域における活断層と歴史地震、愛知県
の地質・地盤(その4)、愛知県防災会議地震部会、122P. +付図
- 岡田篤正(1984):愛知県土地分類基本調査・地形 5万分の1「豊橋・
田原」、15~37、愛知県117P. +付図
- 貝塚爽平(1960):日本の新期洪積段丘にみられる波状の変形、辻村先生
記念論文集、119~131.
- 活断層研究会(1980):日本の活断層——分布図と資料、東京大学出版会
363P.
- 黒田啓介(1966):天伯原面形成についての考察、東海大紀要、2、17
~22.
- 黒田啓介(1966):渥美層群中下部から産出する植物遺体、第四紀研究、

5、49～58

黒田啓介(1967):渥美層郡上部から産出する植物遺体、第四紀研究、6、
57～62.

国土地理院(1972):2万5千分の1 土地条件図「伊良湖岬」.

国土地理院(1973・74):2万5千分の1 沿岸海域土地条件図および
同基礎調査報告書(豊橋・伊良湖岬地区)

庄子士郎編(1978):愛知県地学のガイド——愛知県の地質とそのおいた
ち、コロナ社、256P.

土 隆一(1960):渥美半島周辺の第四系の地史学的問題、第四紀研究、
1、193～211.

名古屋地方気象台(1970):愛知県災害誌. 愛知県、548P.

山田哲雄・高田康秀・山田直利・浅尾一己・大友幸子(1984):伊良湖岬
付近の中央構造線の位置に関する最新の情報、地質学雑誌、90、915
- 918.

Ⅱ 表層地質

1 表層地質概説

本地域は渥美半島の中央部から先端部を占め、山地とそれを取り囲む、丘陵・台地・平地からなる。北側は渥美湾、南側は太平洋、西側は伊勢湾に面している。

山地をつくる岩石の主体は中・古生層（いわゆる秩父古生層）のチャート、粘板岩・砂岩で、千枚岩、蛇紋岩、斑岩を伴う。半島西北端の地下に圧砕岩が見られるが、これは中央構造線（先端部を東北－西南に走る）に伴うものである。中央構造線より西北側の岩層は、伊勢湾中の篠島・野島（南知多町）に見られる花崗岩である。

丘陵をつくる渥美累層は礫、砂、泥（粘土）からなり、東部の海岸沿いではその上に天伯原礫層がのり、天伯原面をつくる。

台地の主体は中位段丘で、高い方の面（福江面）をつくり、礫層である。分布は広い。これより低い低位段丘は赤羽根町若見の北などに局地的に分布する。礫層からなる。

平地をつくるのは完新統で、主に砂からなる砂州（西浜側）・砂丘（表浜側）の堆積物、主に泥からなる海岸平野堆積物（渥美湾側で分布が広い）、礫・砂・泥（粘土）からなる現河床堆積物がある。未固結の地層である。

各岩石・地層の関係を第1表に示した。

本図幅地域内には著しい鉱産資源はなく、碎石場があるのみである。

2 表層地質細説

2.1 未固結堆積物

2.1.1 砂を主とする層（S）

完新統で、砂州および砂丘の堆積層である。西浜側の砂州堆積物が著しい。細～中砂で円磨された礫を含み、淘汰（ふるい分け）はよい。締っていない。西浜において2.5～2.7 mの厚さをもつ。N値は1.0前後より低い。

第1表 地質系統表

地質時代		地層・岩石名	おもな岩質	表層地質分類	
新 生 代	第 四 紀	完新世	完新統(沖積層)	礫・砂・泥	未固結堆積物
		更新世	低位段丘堆積層	礫	
	中位段丘堆積層		礫		
	天伯原礫層		礫	半固結堆積物	
	渥美累層	礫・砂・シルト			
中 生 代	白 亜 紀	花崗岩質岩石 (領家花崗岩類)	花崗閃緑岩	深成岩	
		斑岩質岩石	斑岩		
		蛇紋岩質岩石	蛇紋岩		
		三波川変成岩類	千枚岩	変成岩	
古 生 代	ジュラ紀 / 二疊紀	“秩父古生層”	粘板岩・砂岩、チャート	固結堆積物	

2.1.2 泥を主とする層(m)

海岸平野の堆積層である。渥美湾側を中心に、かなり広い分布がある。適当な地下柱状図がないので、くわしくは判らないが、未固結の泥(粘土)(N値は5前後より低い)からなる。砂を主とする層、礫・砂・泥(gsm)に漸移する。厚さは20m以下であろう。

2.1.3 礫・砂・泥(gsm)

海岸平野より内側の、現在の川によって形成された地層である。田原町の今池川流域、赤羽根町の池尻川流域、渥美町の江比間へ注ぐ川および免々田川流域などで分布が広い。田原町野田では10m前後の厚さをもつ砂層・泥層が見

られ、旧河道にあたる部分では15 mに達し、泥層からなる。渥美町福江では4 m厚さの砂礫層がある。未固結で、N値は砂礫で10前後、砂で5～8、泥で0～7である。

以上の3つの区分は、地形的区分に対応してつくられたもので、実際には漸移している。また、分布は堆積物すべてについて確認されたものではない。

これらの地層のつくる地形を写真1に示した。



写真1 西浜（半島先端部）の完新統（主に砂州堆積物）
をつくる平地

2.1.4 碎屑物（C1）

山地の周縁に発達する礫層で、主に崖錐性堆積物である。すなわち、山腹から風化、侵食された岩石が礫となって下方へ移動し、集積したものである。一般に角礫からなり、淘汰が悪く、後背地である山地から供給された単一材料で構成されることが多い。礫の大きさもさまざまで、1 mをこす巨礫を含むこともある（写真2）。



写真2 砂屑物堆積層とその下位にある中・古生層（黒く見える）、
両者の間是不整合関係（田原町芦ヶ池の東）

分布の広がりはその場所の条件によって異なる。田原町竜頭山の南斜面、
189.2 mの三角点の周囲、赤羽根町の218.4 mの三角点の南斜面、渥美町
の203.8 mの三角点の南側などにやゝ大きい分布がある。

これら崖錐性堆積物の生成時期に巾があり、更新世後期から完新世に及ぶと
推定される。古い時期のものはやゝ締っているが、新しい時期のものはルーズ
でくすれやすい。区分することが困難であるので、一括して、完新世のものとして示した。

2.1.5 礫を主とする層（g）

中位段丘に低位段丘を含めたものである。中位段丘をつくる福江面は沖積面
より高く（比高は場所によって異なるが、10 m前後のことが多い）、天伯原
面より低い。天伯原面との比高は赤羽根付近で約10 mである。

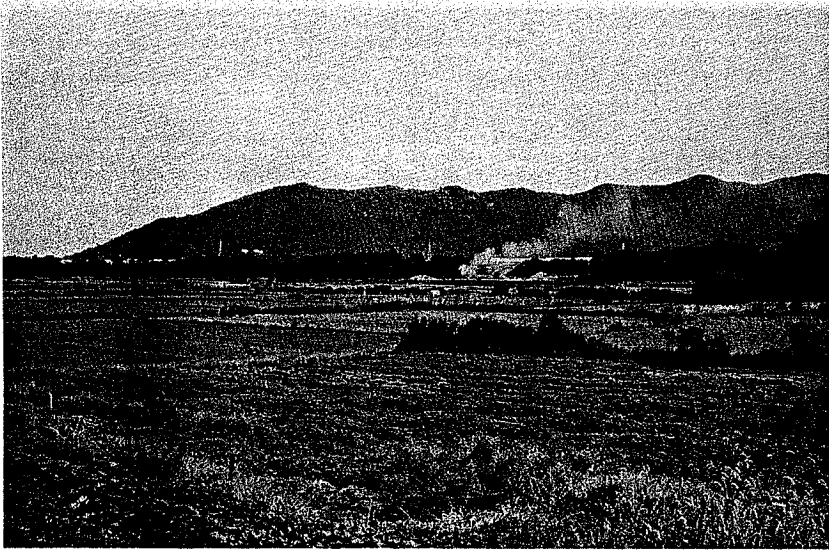


写真3 中段丘のつくる地形（煙の出ているあたりのやゝ高い面）、
後方は中・古生層の山地（渥美町江比間の南）

面高度は西より東へ高くなり、図幅面では渥美湾側で13m～23m、太平洋側で7m～26mである。

主に礫よりなり、ボーリング資料によると、厚さは渥美町伊良湖で5～8m、15mの可能性もある（柱状断面図⑩）、福江で4m、赤羽根町中村で7m、田原町野田で3mである。

渥美町八王寺では露頭が見られる（写真4）。厚さは約5m、上部は土壌化している。中・古生層から由来した砂岩・粘板岩の中～大礫を含む砂礫層である。礫は円～亜円で、やゝ扁平である。基質は粗粒砂で、淘汰はあまりよくない。海成層であろう。

低位段丘礫層は福江面より低い面をつくり、厚さ1m前後の河成の礫からなる。赤羽根町若見の北、池尻などに見られる。



写真4 中位段丘をつくる礫層
(渥美町八王子)

2.2 半固結堆積物

2.2.1 礫を主とする層 (g)

扁平でよく円磨された細～中礫を主とし、ち密に成層した海成の礫層である。厚さは3～6 mで、赤羽根町中村付近より東の、太平洋岸に分布する。表面にわずかに残る堆積面を天伯原面と呼び、構成層(礫層)が天伯原礫層である。下位の渥美累層と整合的である。上位は赤褐色の粘土質砂で、いわゆる古赤色土である。よく締った礫層である(写真5)。

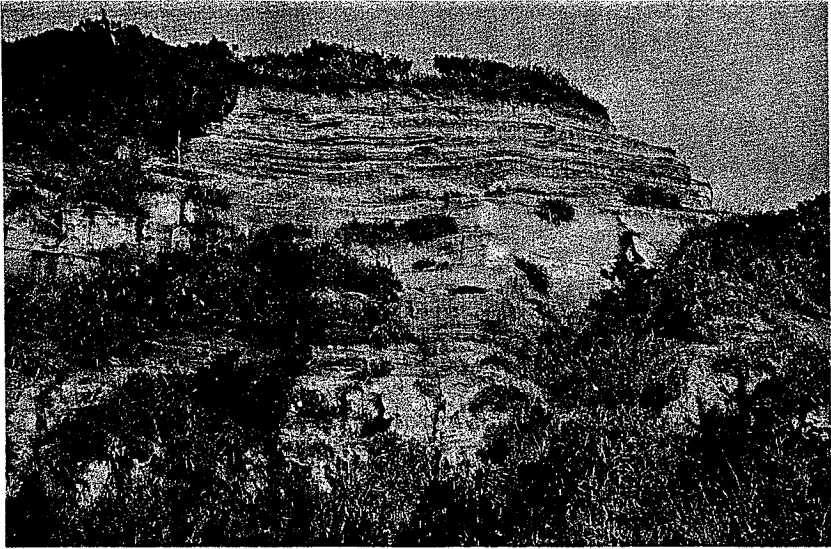


写真5 天伯原礫層(上部)と渥美累層(下部)
(赤羽根町高松)

2.2.2 礫・砂・泥 (gsm)

渥美半島表浜に断崖をつくって露出し、中・古生層とともに、渥美半島を構成する地層である。渥美累層と呼ぶ。ほぼ水平に重なる海成の礫・砂・泥からなり、層厚は表浜で90m+、西北で70m前後である。層相は上下・水平方向に変化し、赤羽根町高松付近では下位に泥層、上位に砂層があり、貝化石を含む(写真6)。西部の渥美町和地では葉理の発達した砂礫層が主体で、中・古生層のチャートにアバット(上下関係でなく、基盤にぶつかるように接すること)する(写真7、8)。

礫種は砂岩・チャート・頁岩が主で、花崗岩・片麻岩・流紋岩などをまじえる。淘汰はよく、細～中礫、円～垂円礫が多い。

天伯原礫層、渥美累層はゆるく北北西へ傾斜する。



写真7 渥美果層(砂礫層)
(渥美町和地)

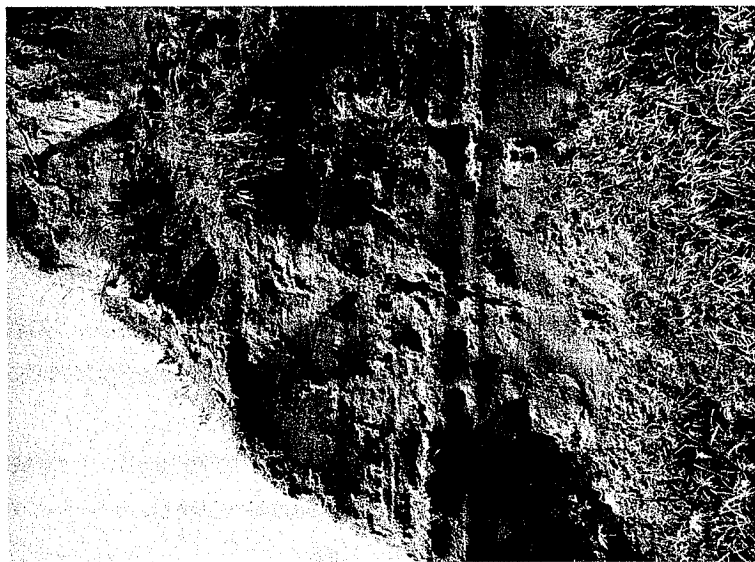


写真6 渥美果層(砂層)
(赤羽根町一色)

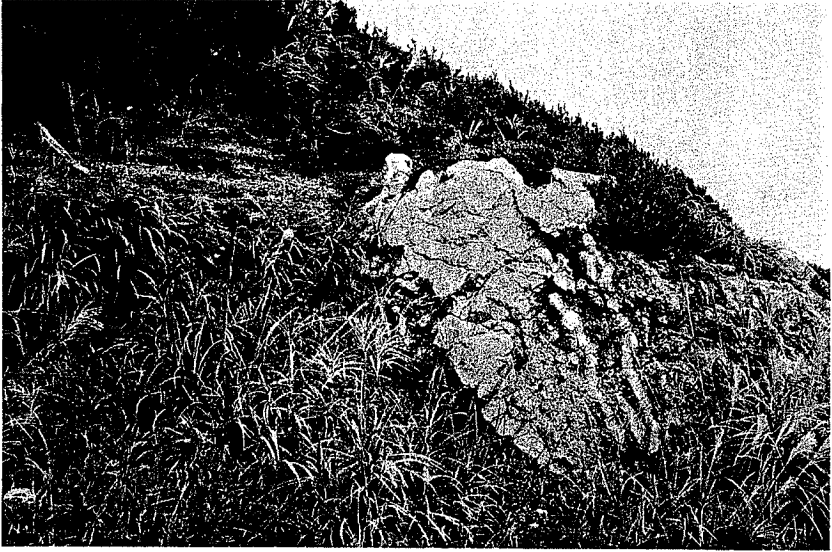


写真8 中・古生層のチャート(右側)に不整合関係で接する渥美累層
(渥美町和地)

2.3 固結堆積物

2.3.1 砂岩・粘板岩 (altsm)

粘板岩を主とした砂岩との互層である。砂岩は硬く、風化するとブロック状にわれる。粘板岩は風化に対して弱く、細粒化し、粘土化することが多い。

2.3.2 チャート

層状のチャートで、うすい泥質部をはさむ。小褶曲をすることが多い(写真9)。硬く、一般に風化に対して抵抗性があるが、地表では風化を受けていることもある。

チャートと砂岩・粘板岩とはさらに大きいスケールで互層するが、この地域ではチャートが多い。風化に対する抵抗性の差が地形にも反映し、チャートの部分は高くてけわしく、粘板岩の部分は低くて緩い。

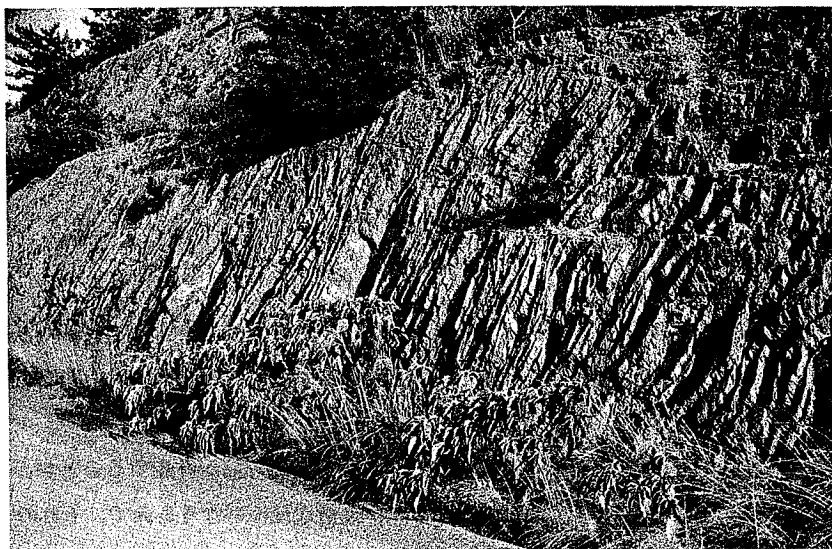


写真9 チャート
(渥美町初立ダム)

2.4 深成岩

2.4.1 花崗岩質岩石 (Gr)

角閃石—黒雲母花崗閃緑岩が主体で、領家花崗岩類のうちの、神原石英閃緑岩に属するものである。中～細粒で、片状構造をもっている。篠島、野島に分布する。領家花崗岩類は中央構造線の北側にのみ分布するので、この両島より南に、中央構造線が存在することを示している。

2.4.2 斑礫岩質岩石 (Gb)

伊良湖岬先端部と渥美町石神の雨乞山北西の小山(7.7.2 mの三角点)付近に小分布をする。

橄欖石を含む斑礫岩である。塊状でち密であり、暗緑色を呈する。変質して緑泥石化しており、また、破碎されている。伊良湖岬では千枚岩に貫入している。

2.4.3 蛇紋岩・橄欖岩（Sp）

伊良湖岬の、伊良湖部落の西方に小分布する蛇紋岩である。青緑色をおびた黒色で、光沢をもち、ち密である。この南西にある斑斕岩が変質したものである。三波川変成岩類（千枚岩）に伴なうものである。

2.5 変成岩類

2.5.1 千枚岩（Ph）

暗黒色で片状構造をもつ。片理は著しい波状～細かい褶曲をする。全体の方向は東北東－西南西である。三波川変成岩類に属し、田原町馬草、伊良湖岬にわずかに分布する。

この他、半島西北端の地下80m以深において、圧砕岩が存在することが、ボーリングの結果によって知られている。中央構造線に伴なうもので、その位置を確定する上に役立っている。暗緑灰色で風化している。

3 表層地質分類と開発および保全との関連

3.1 風化殻

中・古生層では、チャートと砂岩・粘板岩で、風化に対する抵抗性に違いがある。チャートは一般に風化に強く、本地域でも高く、けわしい山はチャートで構成され、山腹に露岩として識別できる場合がある。しかし、実際の露頭を見ると、かなり風化作用を受けて細かいブロックにこわれていることが多い。

砂岩、粘板岩、とくに粘板岩は風化されやすく、時に深層風化を受けて粘土化している。全体に茶褐色を呈し、くずれやすい。

その他の岩石については、分布が小さいので、くわしくはわからないが、花崗岩類は一般に風化作用を受けやすい。その他の深成岩類、変成岩類は風化殻をもつが深層風化はない。

3.2 地下水

本地域では有効な多量の地下水は期待できない。豊川用水による給水によっ

て、この地域の農業が大きく発展したことは、このことを物語っている。

中・古生層などの、基盤をつくる古期岩類には滞水層が見られないことはいうまでもないが、渥美累層は砂・砂礫層を多く含み、これらは滞水層となりうる。しかし、北へゆるく傾く地質構造をもち、地下水は渥美湾側へ流動して滞留しないと思われる。したがって、自由面地下水は表浜側にはほとんど見られないことになる。たゞ、局地的に粘土質層を挟む地域には存在することが知られている。

主要な不透水層は、砂・砂礫層の下位にあり、被圧面地下水をつくるのによい条件ではない。しかし、この層の下にも砂・砂礫層の存在が知られていて、滞水層となりうる。地域によっては、地下水の賦存が考えうる。それはやはり渥美湾側で可能性が大きい。

昭和40年代初めの、地下水利用の例を第2表に示しておく。

第2表 取水施設

所在地	所有者	深度	口径	取水量	ストレーナー位置	用途
渥美町 伊良湖	渥美町	30 m	20 cm	700m ³ /日	20-18m	水道
同 江比間	〃	30 m	20 cm	400m ³ /日	20-18m	水道
同 和地	〃	30 m	20 cm	160m ³ /日	17-15m	水道

3.3 地盤

固結堆積物・半固結堆積物は十分な地盤強度をもち、問題はない。

未固結堆積物のうち、碎屑物の分布する地域は、それが新期に形成されたもので、未固結の岩礫・砂からできている場合には注意が必要である。締ってなく、淘汰が悪くて不均質であり、分布も一様でないので、それらについてチェックが望まれる。

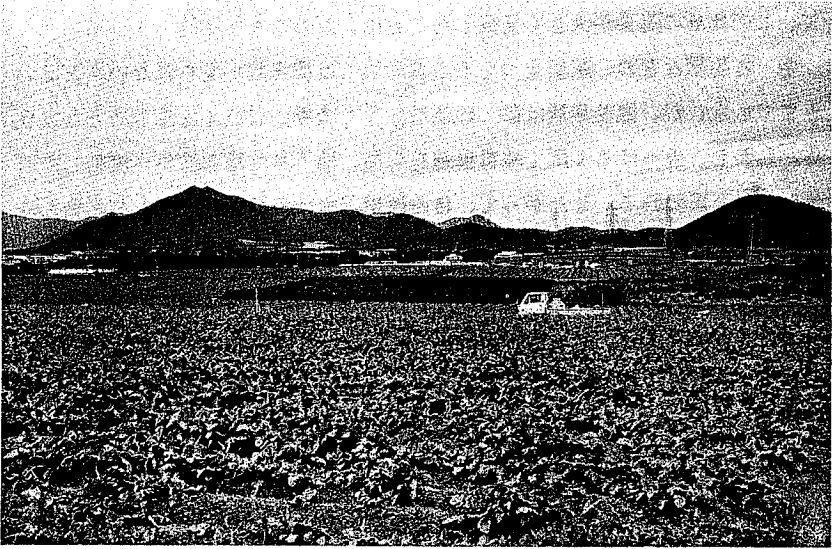


写真10 中・古生層のつくる山地。高い所はチャート、低い所は粘板岩であろう。(赤羽根町)

いわゆる沖積層(完新統)は、地域によって、土質・厚さに違いがある。砂を主とする層はN値が10前後以下、厚さは2.5mをこすことがある。泥を主とする層はN値が5前後以下、厚さは2.0m以下(推定)、礫・砂・泥はN値はさまざま(10前後以下が大部分)で、厚さも変化する(1.5m以下、多くは1.0m以下)。

いずれも地盤として十分な性質をもたないし、場所によって変化がある。ボーリングその他の調査によって、土質、深さ、厚さ、水平的ひろがりなどを確認する必要がある。とくに、泥層の発達すると思われる、渥美湾側の海岸平野部において、注意を必要とする。

3.4 災 害

本図幅地域内で著しい災害として、太平洋岸(いわゆる表浜)における海岸侵食がある(写真11)。渥美累層・天伯原礫層で構成される海食崖は比高が

数10mに及び、雨および波浪によって後退し続けている。このことは、明治以来、3回も道路がつけかえられたことでもよく理解できる。海岸侵食の他、海岸から内陸へ及んでいる谷の谷頭侵食も著しく、対策が必要である。

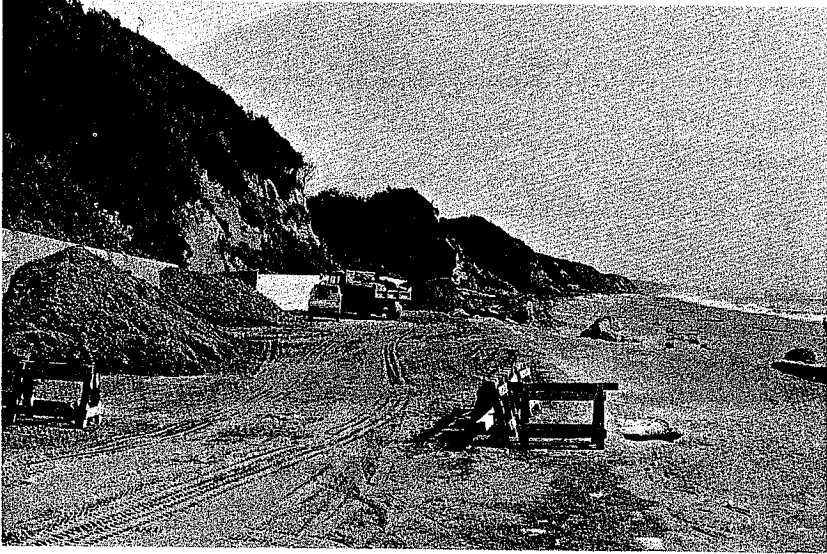


写真11 表浜の海岸侵蝕
(赤羽根町高松)

3.5 その他

本地域内の碎石場として、田原町芦ヶ池の東に5ヶ所、渥美町内に3ヶ所、合計8ヶ所がある。中・古生層の粘板岩を主に採取しているが、碎石というより、土木用土石としての利用と考えられる(写真12)。

鉱山、温泉は地域内には存在しない。

(名古屋大学 糸魚川 淳二)



写真12 砕石場
(田原町芦ヶ池の東)

引 用 文 献

- 地質調査所(1957):20万分の1地質図幅「伊良湖岬」
- Hayasaka, S. (1961): The Geology and Paleontology of the Atsumi Peninsula, Aichi Prefecture, Japan. 東北大学理科紀要(地質学), 33巻1号
- 深田淳夫・糸魚川淳二(1962):20万分の1 愛知県地質図 愛知県
- 池田芳雄(1985):大地は語る。(著者版)
- 石井清彦(1927):7万5千分の1地質図幅「伊良湖岬」および説明書
地質調査所
- 石川佳代・太田陽子(1967):渥美曲隆運動に関する若干の資料. 第四紀研究, 6巻3号
- 糸魚川淳二(1974):20万分の1 土地分類図「愛知県」(表層地質図)
経済企画庁
- (1978):愛知県の地質・地盤(その2) 表層地質(付20
万分の1表層地質図) 愛知県
- (1984):愛知県土地分類基本調査・表層地質 5万分の1
「豊橋・田原」 愛知県
- 黒田啓介(1964):渥美半島の更新統層序についての2、3の問題、地学
しずはた、34号
- (1966):渥美層群中下部から産出する植物遺体、第四紀研究、
5巻2号
- (1966):天伯原面形成についての一考察. 東海紀要、2号
- (1967):渥美層群上部から産出する植物遺体、第四紀研究、
6巻2号
- 土 隆一(1960):渥美半島周辺の第四系の地史学的問題. 第四紀研究、
1巻6号
- 山田哲雄ほか(1984):渥美半島伊良湖岬付近の中央構造線の位置に関する最新の情報. 地質学雑誌、90巻12号

Ⅲ 土 壤

1 土壤概説

1.1 山地及び丘陵地地域の土壤（林地土壤）

本調査地は5万分の1地形図「伊良湖岬」図幅に含まれ渥美郡田原町の一部、赤羽根町の大部分、渥美全町、それに離島篠島の一部が包含される地域の林地土壤である。山体は大山（327.9m）を最高とした山塊をほぼ中心として北東には標高166mから242mにかけての山塊、南東には標高100m以下の丘陵性山地、伊勢湾に面した海岸線には平地林が分在するほかは太平洋岸の台地の肩部にあたる箇所や耕地間等に点在している。

山林として残っている部分の地質の殆んどは、古生代の秩父古生層（チャート）で、耕地や海岸線の平地には洪積世、沖積世の未固結堆積物が分布している。

山体をなす大部分及び点在する平地林の土壤は、褐色森林土であり、伊勢湾に面する海岸線の平地林や、丘陵性山地の主風方向斜面には、砂丘未熟土が分布している。これらは、断面形態、土色、地質母材及び堆積様式等の相違により次の2土壤群、2土壤亜群、6土壤統群、9土壤統に区分された。

土壤群・土壤亜群・土壤統群及び土壤統

（土壤群）（土壤亜群）	（土壤統群）	（土壤統）	
未熟土…砂丘未熟土……………	砂丘未熟土壤	西浜統 伊良湖統	
褐色森林土…褐色森林土	{	乾性褐色森林土壤（黄褐色）	伊古部統
		乾性褐色森林土壤	{ 長仙寺統 蔵王山1統
		乾性褐色森林土壤（赤褐色）	{ 篠島統 大山1統
		褐色森林土壤	蔵王山2統
	〃 （赤褐色）	大山2統	

未熟土は、砂丘未熟土壌で渥美半島先端部の平坦な海岸線の松林に分布するものと、同じく先端部の丘陵性山地の主風方向斜面に堆積するものとに大別された。なお、平坦部に分布するものの中には下層に小円礫を伴う場合もある。褐色森林土は、乾性褐色森林土壌（林野庁分類によるBB型が大部分）と褐色森林土壌に分けられ、乾性褐色森林土壌は黄褐色系、標準的な土色のもの、及び赤褐色系に、褐色森林土壌は標準的な土色のものと赤褐色系に分類された。

乾性褐色森林土壌は、主として、尾根筋や凸型、平行斜面等の残積土及び匍行土に出現し南面の山麓部程赤色が強くなっている。

褐色森林土壌は、主として北斜面や一部西斜面の崩積土や匍行土に出現する。

土壌の生産力は、北斜面や一部西斜面の下腹凹部は比較的高く、主としてヒノキが植栽され、一部枝打ちも行われていた。

一方、海岸線一帯の砂丘未熟土壌はクロマツの人工林が多く、飛砂防備林が殆んどで後方畑地作物の保護林帯として重要な機能を果している。

その他大部分の乾性褐色森林土壌では、クロマツ、アカマツと広葉樹の混交林が多く、また、大山の主として南面の中層木にはウバメガシが混交しており、環境保全上果している役割は大きいので、林地の取扱いには十分注意しなければならない。

1.2 台地及び低地地域の土壌（農地土壌）

渥美半島中央部の珪岩、粘板岩より成る古生層の丘陵地、伊勢湾に面した砂丘地及び遠州灘沿いの洪積台地最南端を除いた沖積平坦地、洪積台地はほとんど農地土壌として区分される。農地土壌の主なる土壌群としては、赤黄色土、褐色低地土、グライ土があり、その他、未熟土、黒ボク土、褐色森林土、灰色台地土、灰色低地土、泥炭土が分布している。また、その分布域をみると、赤黄色土、灰色台地土は渥美半島の洪積台地上の各所に広く分布し、洪積台地間の低地に存在する灰色低地土、グライ土も半島の各所に分布する。一方、褐色低地土、未熟土は半島の最西端のみに分布し、黒ボク土、褐色森林土、泥炭土も分布域は限られている。

赤黄色土、褐色低地土、未熟土は、主にキャベツ、ダイコン等秋冬作を中心とした野菜栽培及び花き、メロン等の施設栽培が盛んで、豊橋と並んで東三河農業地帯の中心となっている。灰色台地土、灰色低地土、グライ土、泥炭土は洪積台地間の小河川の沿岸、沿海部の沖積地等の低湿地に存在し、水稻の栽培が主体であるが、客土による畑転換が進行している。

これらの土壌群の特徴を概説すれば次のとおりである。

未熟土：非固結堆積岩を母材とする風積土壌であり、渥美半島先端の沿海部に分布するのみである。おおむね表層より50cm内外までが砂層で、礫、斑鉄は認められず湧水部位は深い。また、保肥力、保水力ともに劣り養分的にせき薄な土壌である。

黒ボク土：一般には火山放出物を母材とする非泥炭質の腐植含量の高い土壌と定義されているが、県内の黒ボク土壌は花崗岩風化土壌、洪積層土壌の混入する割合が高く、火山灰の性質は弱い。しかし、腐植含量は5～10%と多く、りん酸吸収係数も1000～2000と大きく、黒ボク土壌としての性質は有している。保肥力、保水力とも高いが、有効態りん酸、カルシウム、マグネシウム等の塩基類が不足しやすいが、十分な肥培管理を行えば、物理性が良好であるため畑地としての生産力は高い。また、水田利用のものは、水の影響で酸化沈積物の斑紋が認められ多湿黒ボク土壌として区分されている。

褐色森林土：黄褐色の土色を呈する土壌で、傾斜地に分布するため排水はよく、畑、樹園地として利用されている。本図幅のものは、表層30～60cm以下から礫層となり、土性も強粘質のものが多。

灰色台地土：洪積台地上の低地または斜面に分布し、排水状態がやや不良であるため、全層またはほぼ全層が灰色を呈する土壌である。本図幅のものは土性が粘～強粘質で、水田利用が主体である。

赤黄色土：一般に渥美累層と呼ばれる洪積台地上に分布し、腐植含量は著しく少なく、下層土は粘質ないし強粘質で排水の悪い土壌である。本図幅の代表的な土壌で、土色により赤色土壌、黄色土壌に区別される。畑利用が主体であり、深耕による下層土改善や有機物の施用による改良効果が高い。

褐色低地土：排水の良い沖積地に分布し、全層あるいはほぼ全層が黄褐色の土層から成る土壤である。土性は砂質ないし壤質であり、沖積土壤では地下水位の低い酸化型土壤であるが、本図幅のものは、地下水位が高く、1 m以内に湧水部位をもつ。土性は表層が砂質、下層は礫層となっているため、地下水の停滞が少ないため酸化型の土壤となっていると思われる。保肥力、保水力ともに低いせき薄な土壤である。

灰色低地土：洪積台地間の小河川沿岸に分布し、地下水位はグライ土に比較して低く、土色は灰色ないし灰褐色を呈する。土性は砂質から強粘質に及び、沿海部には礫層の出現する土壤も認められる。主として水田利用であるが、畑利用も行われている。

グライ土：洪積台地間の開析谷や低湿地及び沿海部低湿地に分布し、地下水位が高く、グライ層が出現する。土性は砂質から強粘質に及ぶが、砂質のものは、未熟土と分布を同じくし、その中の低地に分布する。

泥炭土：マコモ、ヨシ等の湿生植物の遺体を母材とした有機物に富む土壤で、沼地等の湿地が水田化されたものである。一般に地盤が軟弱で農耕用大型機械の導入が困難である。

以上のように本図幅の農耕地土壤は土色、腐植層、グライ層、堆積様式、母材等により9土壤群に区分された。なお、断面形態の相違によって、更にこれらは15土壤統群、21土壤統に細分された。この結果は土壤細説の項の土壤統一覧に表示されている。

2 土壤細説

2.1 山地及び丘陵地地域の土壤（林地土壤）

2.1.1 砂丘性未熟土壤

渥美半島先端の平坦地や丘陵性山脈の主風方向斜面の乾燥し易い場所に分布し、10YRの色相を有する土壤で、分布場所により次の2つの土壤統に区分した。

西浜統

洪積世

伊良湖統

洪積世・秩父古生層

西 浜 統 その 1

本土壤統は、渥美半島の先端、西ノ浜に面したほぼ平地のクロマツが主として生育する処に出現し、10YRの色相を有する砂丘性未熟土壤の1タイプである。土性は砂土で深く礫は含まない。構造は未発達である。こゝに植栽されたマツ林は、飛砂防備保安林として後方にひろがる畑地を保護するのに役立っている。

代表断面 (地点番号 ①)

位 置 渥美郡渥美町大字中山字藤原

海 抜 高 2.5 m 傾斜 0° 方向 ——°

地 質 ・ 地 形 沖積世 平地

母材・堆積様式 未固結 砂がち 運積土

林 況 上層：クロマツ 人工林(5令級 3~4 m)

中層：なし

下層：なし

断 面 状 態 L: 2 cm クロマツの落葉枝

F: 2 cm 菌糸を含む

H: 0 cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
I	25	漸変	砂土	なし	灰黄褐 (10YR 6/2)	なし	なし	粗	なし	乾	なし	小中根 含む	
II	45		〃	〃	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	〃	〃	〃	〃	半乾	〃	中根 あり	
III	30+		〃	〃	にぶい黄褐 (10YR 5/4)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	なし	

西 浜 統 その2

本土壤統は、渥美半島の先端、西ノ浜に面したほぼ平地のクロマツが主として生育する処に出現する10YRの色相を有する砂丘性未熟土壤の1タイプである。

土性はほぼ40cm位までは砂土で、それ以下が細・小円礫が極めて多い礫土となっており、時として海水の湧水がみられる。このクロマツ林も飛砂防備保安林として、後方畑地作物を保護する機能は極めて高い。

代表断面

(地点番号 ②)

位 置 渥美郡渥美町大字中山字一繕松
 海 抜 高 3 m 傾斜 ——° 方向 ——°
 地 質 ・ 地 形 沖積世 平地
 母材・堆積様式 未固結 砂がち 運積土
 林 況 上層：クロマツ 人工林(12令級、樹高約6m)
 中層：殆んどなし
 下層：———
 断 面 状 態 L： 2 cm クロマツの落葉枝
 F： 0 cm
 H： 0 cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
I	20		砂土	なし	灰黄褐 (10YR 6/2)	なし	なし	頗る粗	零	乾	なし	小根 含む	
II	10		〃	〃	にぶい黄褐 (10YR 6/4)	〃	〃	粗	〃	〃	〃	小根 あり	
III	10		〃	〃	黄 褐 (10YR 5/6)	〃	〃	〃	〃	半乾	〃	細根 あり	
IV	20+		礫土	細・小円礫 頗る富む	〃 〃						〃	〃	

伊良湖 統

チャートを基岩とする丘陵性山地のうち、渥美町字堀切以西の山地の西～南東にかけて分布している土壌統で、10YRの色相を有する砂丘性未熟土壌である。

チャートを母材とする土壌の上に風によって運ばれた砂が深く堆積したものと思われる。土性は砂土で深く構造林は殆んど発達しておらず最上層に約5cmの腐植の浸透がみられる。

代表断面

(地点番号 ③)

位 置 渥美郡渥美町大字堀切字和名山
 海 抜 高 約70m 傾斜 24° 方向 S24°E
 地 質・地 形 秩父古生層
 丘陵性山地の南東斜面中腹
 母材・堆積様式 チャート 匍行土
 林 況 上層：クロマツ(6令級 10m)
 中層：ウバメガシ、ヒメユヅリハ
 下層：マンリョウ、フジ
 断 面 状 態 L: 3cm ウバメガシ落葉
 F: 1cm
 H: cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
I	5	明瞭漸変	砂土	なし	暗 褐 (10YR3/3-4/3)	含む	なし	頗る粗	零	乾	なし	小根 頗る密	
II	30		〃	〃	にぶい黄褐 (10YR 6/3)	なし	〃	〃	〃	〃	〃	小根 含む	
III	45		〃	〃	にぶい黄褐 (10YR 5/4)	〃	〃	〃	〃	半乾	〃	小根 あり	
IV	20+		〃	細半角礫あり 小半角礫含む		暗 褐 (10YR 3/4)	含む	〃	〃	〃	〃	〃	〃

2.1.2 乾性褐色森林土壌（黄褐色系）

本図幅の太平洋岸にそう段丘の丘陵地を中心に乾燥し易い場所に出現し、10 Y Rの色相を有する土壌で次の1統である。

伊古部統 洪積世

伊古部統

伊良湖岬図幅の太平洋海岸に沿う海岸段丘の丘陵地を中心に出現する土壌統である。第四紀洪積世、半固結の礫、砂、粘土を母材とし、10YRの色相を有する乾性褐色森林土壌である。

A層はうすく、腐植の分解は不良である。林況は、モチノキ等を主体とする天然広葉樹林と、長年の治山事業等の成果によるクロマツを主体とするものがあるが、クロマツは近時の松くい虫の被害により減少し、モチノキ、トベラ等の林分へ変わりつつある。多層林となっており、総合的な機能を果しているのので、林地の保全が必要である。

代表断面 (地点番号 ④)

位 置 渥美郡赤羽根町大字高松字一色
 海 抜 高 20m 傾斜 40° 方向 S3°W
 地 質 ・ 地 形 第四紀洪積世 渥美累層
 東西に走る海岸線に沿う段丘の斜面 中腹
 母材・堆積様式 未固結・礫、残積土
 林 況 上層：モチノキ、メダケ 10令級 8m
 中層：ヤブツバキ
 下層：なし
 断面状態 L： 3cm モチノキ、メダケ等の落葉枝
 F： -cm
 H： -cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	8~14	漸変	S	細円礫 含む	暗 褐 (10YR 3/4)	含 む	粒	頗 る 粗	零	乾	な し	中根あり 小根富	
	11												
B ₁	42~36												
	39												
B ₂	50+	S	小・細円礫 富む	にぶい黄褐 (10YR 5/4)	〃	〃	粗	〃	半 乾	〃	小 根 あ り		

2.1.3 乾性褐色森林土壌

山地の尾根筋や西や南斜面の乾燥した場所や平坦部の平地林に分布し7.5YRの色相を有する土壌で、主に母材により次の2つの土壌統に区分した。

長仙寺統

洪積世

蔵王山1統

秩父古生層(チャート)

長仙寺統

田原図幅に続いて伊良湖図幅に出現する土壌統で、第四紀洪積世の中低位段丘を母材とし、7.5 YRの色相を有する乾性褐色森林土壌である。

部分的に5 Y Rの色相を有する土壌も出現するが図示するに至らなかった。

林況は、クロマツ・アカマツ等の人工・天然林を主体とし、その下層には常緑広葉樹が繁茂し生育は十分とはいえないが、環境保全上重要な機能を果している。

代表断面 (地点番号 ⑤)

位 置 渥美郡赤羽根町大字高松字西山

海 抜 高 30 m 傾斜 12° 方向 N78°E

地 質 ・ 地 形 第四紀 洪積世 中低位段丘

台地の東端 緩斜面 中腹 平行

母材・堆積様式 半固結 匍行土

林 況 上層：クロマツ(6令級 樹高7m)トベラ、ヒサカキ

中層：カクレミノ、ヤブツバキ

下層：ヤブツバキ、ヒサカキ

断 面 状 態 L: 2~3 cm

F: 2 cm

H: なし

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	2~4 3	判然	砂質壤土	なし	褐 (7.5YR 4/3)	含む	粒状	粗	零	乾	なし	小根 頗る密	
B ₁	36~38 37	渐变	〃	細角礫あり	褐 (7.5YR 4/6)	乏し	やん堅果状	中	弱	半乾	〃	中根あり 小根含む	
B ₂	60+	〃	〃	〃	明褐 (7.5YR 5/8)	〃	なし	〃	〃	〃	〃	小根 含む	

蔵王山 1 統

伊良湖岬図幅の東北部等の山岳地形に現われる土壌統である。チャートを母材とし、7.5 Y Rの色相を有する乾性褐色森林土である。A層の上部は乾いている。B層上部の土は固く、乾いている。

谷部には、ヒノキ、スギの活林地もあるが、全般的にクロマツ人工林、天然林で、生産力は低い。しかし、環境保全機能は果されている。

代表断面

(地点番号 ⑥)

位 置 渥美郡赤羽根町大字高松字尾村崎

海 抜 高 140 m 傾斜 28° 方向 S80°E

地 質 ・ 地 形 秩父古生層、チャート

南から北へ走る尾根の東斜面の中腹平行斜面

母材・堆積様式 チャート 残積土

林 況 上層：クロマツ、ヤシャブシ、コナラ、クロガネモチ等の
天然林 8~10令級 樹高8~10m

中層：ネズミモチ、ゴンズイ、サネカズラ

下層：ネズミモチ、ヤブコウジ、マサキ、カクレミノ、ツワブキ
樹木の生育不良

断 面 状 態 L: 4 cm コナラ、ヤシャブシ、サルトリイバラ等の落葉枝

F: 1 cm

H: - cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	15	漸変	L	小角礫 富む	褐 (75YR 4/4)	含 む	粒・ 堅果	粗	零	半 乾	なし	小根 富む	
B	40		SiL	〃 〃	褐 (75YR 4/6)	乏 し	なし	中	中	〃	〃	小根 含む	
C	45+		CL	〃 〃	明褐 (75YR 5/6)	〃	なし	密	〃	〃	〃	小根 あり	

2.1.4 乾性褐色森林土壌(赤褐系)

主として大山・雨乞山を連ねる山体の尾根筋、凸型斜面の乾燥し易い場所及び篠島・野島に分布し、5 Y Rの色相を有する土壌で、秩父古生層のチャート及び花崗岩類を母材とする次の2統である。

大 山 1 統	チャート
篠 島 統	花崗岩類

大山 1 統

本土壤統は主に田原街道以南の宇津江と芦村地内に存する丘陵性山地と大山（327.9m）を最高峰とし西、北西または北から北東にかけて丘陵性山地にひろがる本図幅としては最も分布の広い土壤統で、5 Y R の色相を有する乾性褐色森林土壤（赤褐系）である。

なお、本山地の処々に小面積ではあるが7.5 Y R の色相を有するものも出現する。

土性は主として砂壤土であるが、埴壤土も出現する場合がある。

A層は全般に浅く、その生産力は低い。林相は主として天然生アカマツが上層をなし中層にはその他に広葉樹とウバメガシが混生し（南面に多い）ており環境保全上果す役割は大きい。

代表断面 (地点番号 ㊸)

位 置 渥美郡渥美町大字石神字外山
 海 抜 高 60 m 傾 斜 26° 方 向 N45°E
 地 質 ・ 地 形 秩父古生層
 雨乞山から北東に派生する小尾根の下腹や凸型斜面
 母材・堆積様式 チャート 匍行土
 林 況 上層：アカマツ（6令級 樹高 8m）
 中層：ウバメガシ、コナラ、タイミンタチバナ
 下層：コシダ（枝）
 断 面 状 態 L： 5 cm コシダ、ウバメガシ落葉
 F： 3 cm
 H： 1 cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	8	明瞭 漸 変	壤土	小角礫 富む	暗赤褐 (5YR 3/3)	富む	粉状	粗	弱	乾	小根 あり	小根 富む	
B ₁	17		砂壤土	中角礫 富む	にぶい赤褐 ～赤褐 (5YR 4-5/6)	乏し	粉状・ 粒状	中	中	半乾	なし	小根 含む	
B ₂	55+		〃	細角礫富む 大角礫あり	赤褐 (5YR 4/6)	〃	なし	や 中	〃	〃	なし	小根 あり	

篠 島 統

この土壌統は、三河湾の篠島と野島に出現する 5 Y R の色相を有する乾性褐色森林土壌（赤褐色系）である。

この土壌統の多くは、A 層が数 cm あり、A 層は浅く、B 層への推移は判然としている。表層の構造は粒状を主体とし、堅果状構造もみられる。

樹木の生長はよくないが、谷部や凹地形でのクロマツの生育は良好であり、林床の植生を含めて、島の環境保全上、森林の存在は欠くことができない。

代表断面 (地点番号 ⑦)

位 置 知多郡南知多町篠島字手取 7
 海 抜 高 25 m 傾斜 15° 方向 S 32° E
 地 質 ・ 地 形 領家花崗岩類
 北から南へ走る尾根から南々西に下った中腹緩斜面
 母材・堆積様式 花崗岩類 匍行土
 林 況 上層：クロマツ (7 令級 樹高 8 m)
 中層：トベラ、カクレミノ、ヒサカキ
 下層：ウラジロ、カクレミノ
 断 面 状 態 L: 1 cm クロマツ 落葉
 F: 2 cm
 H: 0.3 cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	3	判然 漸変	壤土	なし	暗赤褐 (5YR 3/3)	富む	粒状 堅果	中	中	半乾	小根あり	小根含む	
B ₁	23		〃	〃	暗赤褐 (5YR 3/4)	含む	堅果	中	強	〃	なし	小根あり	
B ₂	74+		〃	〃	〃	赤褐 (5YR 4/6)	乏し	なし	中	強	〃	〃	中根あり

2.1.5 褐色森林土壌

本図幅の北東部と一部中南部の丘陵性山地等の尾根や凸型斜面に分布し、7.5 Y Rの色相を有する褐色森林土壌である。次の1統のみである。

蔵 王 山 2 統 チャート

蔵王山 2 統

伊良湖岬図幅の北東端、滝頭山を中心とする山岳地形の北斜面や沢筋に主に現われる土壌統である。母材は秩父古生層のチャート等で、主に 7.5 Y R の色相を有する適潤性褐色森林土壌である。

A 層の表面はやや乾くが、下部は適潤である。ヒノキの造林地もあり、生育は良好である。

代表断面 (地点番号 ⑨)

位 置 渥美郡田原町大字田原字滝頭
 海 抜 高 100 m 傾斜 25° 方向 N40°W
 地 質 ・ 地 形 秩父古生層 チャート
 西から東へはしる尾根の北側、平行斜面下部
 母材・堆積様式 チャート 残積土
 林 況 上層：ヒノキの人工林、14 令級 樹高 20~22 m
 中層：ヤブツバキ、ネズミモチ、カクレミノ、ヒサカキ、シロダモ
 下層：マンリョウ、テイカカズラ
 断 面 状 態 L : 2 cm ヒノキ等の落葉枝
 F : - cm
 H : - cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	15	漸 変 漸 変	CL	大角礫あり	褐 (7.5YR 4/3-4)	含 む	塊・堅	粗	中	半 乾	なし	小中根あり	
B	35		〃	〃	褐 (7.5YR 4/6)	乏 し	上: 堅 下: なし	中	〃	〃	〃	小根あり	
C	50+		〃	〃	〃	赤 褐 (5YR 4/6)	〃	なし	〃	〃	〃	〃	〃

2.1.5. 褐色森林土壌（赤褐系）

大山・雨乞山を連ねる山地の北側下腹の崩積斜面に分布し、5 Y Rの色相を有する土壌で、次の1統のみである。

大 山 2 統 チャート

大山 2 統

本土壤統は大山1統の主として北面凹部の崩積地に出現し、5 Y Rの色相を有する適潤性褐色森林土壌である。土性は主として埴壤土でA層も10 cm内外で腐植し比較的深く浸とうしている。林相はヒノキが人工植栽されその手入れも比較的よく行われている。

代表断面 (地点番号 ⑩)

位 置 渥美郡大字石神字外山

海 抜 高 80 m 傾斜 25° 方向 N55°W

地質・地形 秩父古生層

ほゞ 北面する下腹凹形斜面

母材・堆積様式 チャート 崩積土

林 況 上層：ヒノキ 人工林(約7令級 樹高約13 m)

中層：ヒサカキ

下層：シダ類

断面状態 L: 2 cm ヒノキ落葉枝

F: 1 cm

H: 0 cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	14	判然変	埴壤土	細・小角礫 含む	暗赤褐 (5YR 3/3)	富む	団粒 (鈎)	粗	中	半乾	小根あり	小根含む	
B ₁	26		〃	小・中角礫 含む	にぶい赤褐 (5YR 4/4)	含む	堅果		強	〃	なし	中根あり 小根あり	
B ₂	60+		〃	大角礫 含む	赤褐 (5YR 4/6)	乏し	なし		中	〃	〃	中根含む	

2.2 台地及び低地地域の土壌（農地土壌）

図幅内に分布する土壌統の種類とその断面形態の特徴、分布状況等は次のとおりである。なお、土壌統一覧を表Ⅲ-1に示した。

2.2.1 砂丘未熟土壌

1) 伊良湖統

非固結堆積岩を母材とする風積土壌で、表層より50cm内外が砂層であり、礫、斑紋は認められず湧水部位は1m以上で深い。また、保肥力（陽イオン交換容量）、保水力ともに劣り養分的にせき薄な土壌である。

渥美半島先端の遠州灘よりの砂丘地に分布し、畑として利用されている。

2.2.2 厚層土ボク土壌

1) 野田統

腐植含量5～10%の黒ボク層の厚さが1m以上の土壌で、土性はおおむね粘質であるが、まれに壤質のものもみられる。礫は少なく、斑紋も認められない。りん酸吸収係数は2000内外と高く、また、保肥力も高い。

大部分は、渥美町の平坦な低台地、丘陵地に分布し、畑、樹園地として利用されている。

2.2.3 多湿黒ボク土壌

1) 平田統

地下水、またはかんがい水の影響をうけて生成された黒ボク土壌で、土壌断面に鉄の酸化沈積物による斑紋が認められる。黒ボク層の厚さは50cm以上とやや厚いものが多い。黒ボク層の下の土色は灰色を呈する。土性は全層にわたって強粘質のものが多い。りん酸吸収係数は1400内外とやや高く、また保肥力も概して高いが水田としての生産力は高くない。

渥美町の丘陵間の低い平坦な洪積台地上に分布し、水田として利用されている。

2.2.4 褐色森林土壌

1) 西石田統

豊橋地区の西石田統は、土色から赤黄色土に区分されたが、渥美地区の西石田統は、土色が黄褐色を呈することから褐色森林土壌に区分した。

30～60 cmの深さから礫層が出現する黄褐色を呈する土壌で、上層の礫含量も概して多い。土性は粘質であるが、壤質のものも存在する。

渥美半島の固結堆積岩より成る丘陵緩斜面洪積台地上に分布し、畑として利用されている。

2.2.5 細粒灰色台地土壌

1) 高棚統

排水のやや不良な地形の洪積台地に生成し、全層にわたって灰色を呈する土壌である。土性は表層がおおむね粘質、下層は粘質ないし強粘質で透水性は不良である。礫は少なく、全層にわたって斑鉄が認められる。

渥美町西部の洪積台地が沖積層下に沈みこむ地域、田原町の中央部に大部分が分布し、水田として利用されている。

2) 戸ヶ崎統

高棚統に類似するが、高棚統より排水条件がやや良好な地形に分布するため土色は、ほぼ全層にわたって灰褐色を呈する。下層に礫を含むものが多い。斑鉄は下層に認められる場合が多い。

洪積平坦台地や扇状地に分布し水田として利用されている。

2.2.6 赤色土壌

1) 西尾R統

西尾統に類似するが心土の土色が赤色を呈する点が異なる。表層（作土層）は黄褐色～黄色を呈するものが多い。作土及び作土下の土性は粘質ないし強粘質で密であり、作物根の伸長、透水性が悪く、土壌の物理性は不良である。

渥美半島全域にわたって洪積台地上に西尾統と混在して分布し、主として野菜畑として利用されている。

2.2.7 黄色土壌

1) 西尾統

本図幅に分布する最も代表的な土壌であり、おおむね全層が黄色ないし黄褐色を呈する。土性は表層が壤～粘質、下層が粘～強粘質で西尾R統と同様に下層土がち密で強酸性のものが多く、土壌の理化学性は不良である。作土の腐植含量も全般的に極めて少なく、耕起碎土がやや困難である。有機物の施用、深耕等による土壌物理性の改善が進められている。

渥美半島の洪積台地上に分布し、主に野菜畑として利用され、代表的な野菜産地を形成している。

2) 八王子統

表層30～60cm以下が礫層の黄色を呈する土壌で、上層の礫含量も概して多い。土性は粘～強粘質である。母材は硅岩、粘板岩等の古生層より成る固結堆積岩で、近年の農耕地造成により新たに設定された土壌統である。作土層が浅く、下層土は極めてち密で根の伸長を阻害するものが多く、深耕、有機物の施用等の土壌改良が必要である。

渥美半島西部の硅岩、粘板岩より成る丘陵地に分布し、畑として利用されている。

3) 中畑統

西尾統に類似するが、下層に酸化沈積物の斑鉄が認められる点で異なる。土色、土性は西尾統とほとんど差がない。

地形的に排水不良な洪積台地上の凹地に多く分布する。畑として利用されている。

2.2.8 粗粒褐色低地土壌

1) 藤原統

表層0～30 cm以下から礫層の出現する黄褐色を呈する土壌である。土性は全層砂質で、保水力、保肥力とも極めて小さい。また、50 cm内外から湧水部位が出現する。

渥美半島最西端、伊勢湾に面した低地に分布し、畑として利用されている。

2.2.9 細粒灰色低地土壌

1) 大治統

おおむね全層が灰色を呈する細粒質の沖積層土壌で、表層は主として粘質、下層は粘～強粘質である。酸化沈積物の斑鉄はほぼ全層にわたって認められ、特に下層に管状の斑鉄が多い。肥よくな土壌であるが排水はやや不良である。洪積台地間の河川沿岸平坦地に分布し、水田として利用されている。

2.2.10 灰色低地土壌

1) 針曾根統

ほぼ全層にわたって灰色を呈する壤質の土壌で、県下でも分布の多い沖積の代表的な水田土壌の1つである。一般に作土層及びすき床層に斑鉄が認められるが、下層には少ない。80 cm内外の深さに、しばしば湧水面があるが、透水性は良くグライ化は進んでいない。

洪積台地間の河川沿岸平坦地に分布し、水田として利用されている。

2.2.11 粗粒灰色低地土壌

1) 西境統

表層30～60 cm以下に礫層の出現する灰色を呈する砂質土壌である。表層50～100 cm以下の深さから湧水面が出現し、下層には、管状の斑鉄が認められる。藤原統と類似する土壌であるが、土色、斑鉄の有無により区別される。

三河湾に面した沖積低地に島状に分布し、畑として利用されている。

2.2.12 細粒グライ土壌

1) 鷺塚統

強粘質のグライ土壌で50 cm内外の深さからグライ層になっている。表層は一般に灰色を呈する。土性はおおむね全層が強粘質である。70 cm内外の深さに湧水面を持ち、酸化沈積物の斑鉄はほぼ全層にわたって認められる。地下水位が高く排水も不良である。

洪積台地間の平坦低湿地に分布し、水田として利用されている。

2) 志籠谷統

鷺塚統に類似するが粘土含量は鷺塚統より少なく粘質である点が異なる。

洪積台地間の解析谷、平坦低湿地に分布し、水田として利用されている。

3) 兼原統

30～60 cmの深さ以下から礫層の出現するグライ土壌で、30～80 cm以下の層はグライ層となっている。表層は一般に灰色を呈し、作土の土性は粘質、作土下の土性は壤質ないし粘質で、下層土の透水性は鷺塚統、志籠谷統より良いが、地下水位が高いためグライ化している。斑鉄は作土層及びすき床層に認められるが、下層土には認められない。

沿海部低湿地に分布し、水田として利用されている。

2.2.13 グライ土壌

1) 寺津統

作土層を除く全層が青灰色を呈するグライ層になっている壤質の強グライ土で、50 cm内外からしばしば砂層が出現する。一般に湧水面は高く湿田であり、表層には斑鉄を多く含む。

沿海部平坦低湿地に分布し、水田として利用されている。

2) 開正統

グライ層が30～80 cmの深さに出現する砂壤質の土壌である。下層土に粘質の層をささむものもある。地下水位は寺津統より低く、表層は灰色を呈する。作土直下に斑鉄を多く含む。

洪積台地の解析谷に分布し、水田として利用されている。

2.2.14 粗粒グライ土壌

1) 西小椰統

全層あるいは作土直下からグライ層となっている砂質の強グライ土壌である。おおむね全層が砂質で、一般に湧水面が高く、作土附近から湧水するものが多い。作土の土壌還元が進行しやすく、このため水稻根の障害が多いので生産力は低い。

渥美半島最西端、砂丘地帯の低湿地に分布する。水田として利用されている。

2.2.15 低位泥炭土壌

1) 高木統

深さ1 m以内に50 cm以上の厚さの低位泥炭層のある土壌で、泥炭層の上層も腐植含量が多い。地下水位は高く、泥炭層及びその下層はグライ層となっている。土性は全層にわたっておおむね強粘質である。このような土壌は地耐圧が小さく、水田機械化の阻害要因となっている。

洪積台地間の平坦低湿地に分布し、主に水田として利用されている。

Ⅲ-1表 土 壤 統 一 覧 表

土壌群	土壌統群	土壌統	土色	腐植層	礫層	土 性		グラ イ層	堆積 様式	母材	地目	備 考	
						表層	次層						
未熟土	砂丘未熟土壌	伊良湖	黄 褐	なし	なし	砂 質	壤 質	なし	風積 (非火 山性)	非固結 堆積岩	畑		
黒ボク土	厚層黒ボク土壌	野田	黒	全層 腐植層	〃	壤~粘質	壤~ 強粘質	〃	洪積	〃	〃		
	多湿黒ボク土壌	平田	黒~灰	全層 腐植層	〃	粘~ 強粘質	〃	〃	〃	〃	水田	斑鉄あり	
褐色森林土	褐色森林土壌	西石田	黄 褐	なし	あり	壤~粘質	〃	〃	〃	〃	畑	30~60cm以下 礫層	
灰色台地土	細粒灰色台地土壌	高棚	灰	〃	なし	粘~ 強粘質	粘~ 強粘質	〃	〃	〃	水田	斑鉄あり	
		戸ヶ崎	灰 褐	〃	〃	強粘質	強粘質	〃	〃	〃	〃	〃	〃
赤黄色土	赤 色 土 壌	西尾R	赤	〃	〃	粘~ 強粘質	粘~ 強粘質	〃	〃	〃	畑		
		西尾	黄~黄褐	〃	〃	壤~粘質	壤~ 強粘質	〃	〃	〃	〃	〃	
	黄 色 土 壌	八王子	黄	〃	あり	粘~ 強粘質	粘~ 強粘質	〃	残積	固結 堆積岩	〃	30~60cm以下 礫層	
		中畑	黄~黄褐	〃	なし	壤~粘質	壤~ 強粘質	〃	洪積	非固結 堆積岩	〃	斑鉄・マンガン結 核あり	
褐色低地土	粗粒褐色低地土壌	藤原	黄 褐	〃	あり	砂 質	砂 質	〃	水積 (海成)	〃	〃	0~30cm以下礫層	
灰色低地土	細粒灰色低地土壌	大治	灰	〃	なし	粘~ 強粘質	粘~ 強粘質	〃	水積	〃	水田	斑鉄あり	
	灰色低地土壌	針曾根	〃	〃	〃	壤~粘質	壤~粘質	〃	〃	〃	〃	〃	
	粗粒灰色低地土壌	西境	灰~灰褐	〃	あり	砂 質	砂 質	〃	〃 (海成)	〃	畑	30~60cm以下 礫層、斑鉄あり	
グライ土	細粒グライ土壌	鷲塚	灰/青灰	〃	なし	強粘質	強粘質	あり	水積	〃	水田	30~80cm以下グライ イ層、斑鉄あり	
		志籠谷	〃	〃	〃	粘 質	粘 質	〃	〃	〃	〃	〃	
		兼原	〃	〃	あり	〃	壤~粘質	〃	〃	〃	〃	〃	30cm以下斑鉄なし 30~60cm以下礫層
	グライ土壌	寺津	青 灰	〃	なし	壤 質	〃	〃	〃	〃	〃	〃	作土直下からグライ イ層、斑鉄あり
		開正	灰/青灰	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	30~80cm以下グライ イ層、斑鉄あり
	粗粒グライ土壌	西小瀬	青 灰	〃	〃	砂~壤質	砂 質	〃	〃	〃	〃	〃	作土直下からグライ イ層 30cm以下斑鉄なし
泥炭土	低位泥炭土壌	高木	黒	全層多 腐植層	〃	強粘質	強粘質	なし	〃	〃	〃		

Ⅳ 土地利用の現況

伊良湖岬図幅に含まれる町村は、渥美半島部に当る田原町、赤羽根町および渥美町の3町と、本図幅の北西部に一部が含まれる南知多町からなる。後者は、篠島と野島の二島を中心とするものである。南知多町全域の土地利用の概略については第Ⅳ-1表の通りである。それを篠島に限ってみると、漁業およびその加工とレジャー産業をはじめとする第3次産業が展開する島と特徴づけることが出来る。

しかし本図幅に占める南知多町の面積は極めて小さく、以下の検討は、渥美半島部地域に向けたい。その土地利用の現況と最近の動向を第Ⅳ-1表を中心にして検討すると、以下のように要約出来る。

まず農地および森林が目立つのが本図幅の特徴である。すなわち農地としては畑地と水田地域の展開が本図幅の西部および東部地域に、また森林についてはとりわけ針葉樹林の展開が中央部および北東部地域に目立つのである。例えば農用地は、1980年現在田原町、赤羽根町および渥美町の3町村平均で、土地利用面積の35.6%を、また森林面積は31.2%を占めている。

この地域は農用地が卓越するのみならず、その農業水準も愛知県のみならず全国でもトップ水準の高位生産性農業地域となっている。ちなみに1農家当り農業所得は、1983年現在全国平均97万円、愛知県平均85万円に対して赤羽根町および渥美町では415万円および308万円と際立って高い水準にある。これは1戸当り経営耕地面積が大きいこととその土地利用が極めて集約的なことによる。すなわち1農家当り経営耕地面積は、1985年現在愛知県平均0.59haに対して、田原町、赤羽根町および渥美町のそれは、それぞれ1.00ha、0.93haおよび1.07haと、ほぼ2倍に当る。また耕地利用率は、例えば1980年の渥美町のそれは159%にも達し、1983年現在の耕地10aに当り生産農業所得は、愛知県平均8.1万円に対し、田原町、赤羽根町および渥美町のそれは、それぞれ21.8万円、37.3万円および24.5万円と高水準に達する。

このように高い土地生産性は、成長作物たる野菜と畜産に負う所が大である。

すなわち1985年に農産物を販売した農家について販売金額が第1位を占める部門別農家率をみると、畑地率が51.6%、水田率が38.1%の田原町では野菜が38%、施設園芸が16%、稲作が14%と、一方畑地率が67.1haと高い赤羽根町では施設園芸が81%、野菜が5%、養豚が4%、さらに畑地率が73.1%と高い渥美町では施設園芸が54%、野菜が37%、酪農が3%と続く。

野菜ではキャベツ、温室メロン、トマト等が、花卉では温室の電照菊をはじめとする菊、鉢物が、畜産では豚、肉用牛、牛乳等の生産が目立つ。ちなみに1983年の個別農産物粗生産額順位とその構成比を第3位までみると、田原町では豚が28.4%、鶏卵が10.6%、菊が5.7%と、また赤羽根町では菊が34.7%、豚が17.1%、温室メロンが14.7%と、さらに渥美町では菊が13.9%、キャベツが13.8%、豚が8.9%となっている。特に電照菊をはじめとする温室やハウス園芸は、とりわけ温暖な黒潮の流れに面した赤羽根町を中心とする太平洋岸地域に目立っている。一方、新しい開拓地でもあり経営耕地基盤および規模が優れた渥美町とりわけ中山地区ではキャベツを中心とする野菜生産が、また最も都市および港湾部に近い田原町では豚をはじめとする畜産が目立つのである。

以上から理解出来るように農家は農業のみでも十分生活し得る水準にあり、農家率は田原町、赤羽根町および渥美町では32.8%、71.3%および41.9%と高い水準にある。またその就業形態に関しても専業農家率および第2種兼業農家率は、愛知県平均11%および75%に対し、田原町では34%および39%、赤羽根町は54%および19%、渥美町は55%および20%と極めて高い専業農家率を誇っている。また農業労働力の量的・質的水準も高いのみならず、農業労働力および農家の減少は低位にとどまっている。それはとりわけ赤羽根町に顕著で、例えば1970~80年の赤羽根町の農家数をみると、その減少は愛知県平均14.7%に対し、5.2%に過ぎない。また農地面積の減少も、同期の愛知県平均の23.1%に対して、3町のそれは9.8%と極めて軽微なものとなっている。なかでも渥美町のそれは3.6%と低位にとどまっている。

以上の高位生産性農業の展開とその安定に、1968年に通水しこの半島を縦走する豊川用水が果して来た役割についてはここで改めて言う必要もなからう。

渥美半島先端部にみられる初立ダムはこの用水の最終コントロール地点である。

農地に次いで高い土地利用をなす森林については、そのほとんどが天然の針葉樹で、本図幅の北東部および中央部に目立つ。その所有形態はすべて民有林であり、その樹種はほとんどが松で、その森林資源としての価値は必ずしも高いものとは言えない。ただ渥美半島の南西端部およびとりわけ西端部の海岸沿いには保養林としての人工の針葉樹林が整備されている。

一方、第3位の土地利用をなす住宅地については、近年増加傾向にあるもののなお低位にとどまっている。ただ主たる通勤先である豊橋市に隣接し、また工業化の進展がみられる田原町の宅地化の進展は目覚ましく、1970~80年の10年間にその面積は280haから690haへと2.5倍の伸びを示したが、なおその割合は全面積の8.7%に過ぎない。本図幅で宅地の地域的展開をみると、渥美湾に面したとりわけ渥美町の福江および中山地区に目立つ。他には国道259号沿いおよび太平洋岸沿いの県道伊良湖岬白須賀線沿いにもみられる。

工業用地の展開はさらに低位である。ただ東三河臨海用地造成事業が進み、1982年現在714haの造成地をはじめとして企業の進出がみられる田原町では工業化の進展が著しい。1970~80年の10年間に工業用地面積は23haから336haへと14.6倍も増大した。その主要業種はトヨタの進出に伴う自動車工業を中心とする輸送機器(3社)で、1982年の製造品出荷額の92.4%を占め、2位の食品工業(20社)の3.5%を大きく離している。しかし本図幅にはその展開そのものはなお及んでいない。他の町例えば渥美町では沢庵等農産物加工としての食品工業が目立ち、出荷額に占める比率は59.8%となっている。

また伊勢湾に面しては、1985年現在出力240万KWを誇る渥美火力発電所が設置され、その周辺には緑地帯が設けられ環境への配慮も窺える。税金をはじめとするメリットは言うまでもないが、地元からの雇傭という点、環境保全、高位生産性農業を誇る農民および漁民等地元との兼合等難しい問題もある。

またノリ、貝をはじめとする浅海漁業もみられ、渥美町および赤羽根町には漁港、水揚げおよび若干の加工施設がみられる。

さらに渥美半島は太平洋岸をはじめとして景勝に恵まれ、その先端は三河湾

国定公園、県立自然公園に指定されている。特に島崎藤村のヤシの実の詩で有名な恋路ヶ浜をはじめとする一帯は県下屈指のリゾート地であり、自転車専用道路、ゴルフ場、国民休暇村をはじめとしてレジャー施設等が展開し、例えば渥美町を訪れる観光客は年間260万人にも昇っている。しかしその利用をめぐり、例えば太平洋岸の海食崖等へのゴミの投棄をはじめとして地元とのあつれきも生じている。

参 考 文 献

- 愛知大学中部地方産業研究所編（1982）、『東三河の経済と社会第3輯』、
愛知大学中部地方産業研究所。
- 青野寿郎・尾留川正平編（1969）、『日本地誌第12巻、愛知県・岐阜県』、
二宮書店
- 赤羽根町史編纂委員会（1968）、『赤羽根町史』、赤羽根町。
- 安藤萬壽男・伊藤郷平・佐々木清治・山岡政喜編（1969）、『日本地誌ゼ
ミナールⅤ東海地方』、大明堂
- 伊藤郷平（1952、53）、『渥美半島の農業地域構造』、愛知学芸大地理
学報告1、2。同（1953）、『日本農業の労働構造の地理学的研究』、
愛知学芸大地理学報告2。
- 伊藤鎗市（1964）、『愛知の暖地農業渥美編』、愛知農林統計協会。
- 太田更一・佐藤政良ほか（1973）、『豊川用水の成立と農業の展開1、2、
3』、岐阜大学農学部研究報告34。
- 太田理子（1977）、『渥美半島赤羽根町の農業構造』、経済地理学年報
23-2。
- 大畑昇一（1970）、『渥美半島における大規模土地利用』、農業土木学会
誌38-8。
- 川口民生（1965）、『渥美半島における菊の集団栽培』、農業及園芸40
-1。
- 川越淳二（1962）、『渥美半島における温室栽培の普及過程について』、
総合郷土研究所紀要8。
- 栗原光政（1949）、『渥美の地理』、渥美郡新教育研究会。同（1955）、
『渥美半島漁村の地理学的研究』、愛知大学総合郷土研究所紀要1。
同（1981）、『戦後の東三河における工業の変容』、愛知大学地理学
研究報告1。同（1982）、『東三河における主要工業の盛衰』、愛知
大学総合郷土研究所紀要27。

- 小山智士・伊藤鎗市（1963）、「渥美の農業1～3」、農林統計調査13
- 5、6、10。
- 杉浦明平（1960）、「渥美の農業」、農林統計調査。
- 鈴木啓之（1957）、「渥美半島表浜の集落」、愛知学芸大学地理学報告
9・10。
- 大明堂編集部編（1983）、『新日本地誌ゼミナール4 中部地方』、大明堂。
- 田原町史編纂委員会（1968）、「田原町史」、田原町。
- 高木和広（1971）、「東三河における養豚業の地理学的研究」、愛知教育
大学地理学報告36・37。
- 中日新聞開発局編（1976）、『愛知百科辞典』、中日新聞本社
- 豊川用水研究会（1975）、「豊川用水史」、愛知県。
- 原田公宏（1970）、「豊川用水の通水に伴う農業地域の変容とその効果」、
愛知教育大学地理学報告34。
- 原田紀保（1957）、「渥美半島表浜地域における離村現象の地理学的研究」、
愛知学芸大学地理学報告9・10。
- 松井貞雄（1967）、「渥美半島における温室園芸の地域形成と地域分化」、
地理学評論40-8。同（1971）、「温室園芸地域の特産地化」、地
理学評論44-3。
- 森下光夫（1958）、「奥渥美」（日本の土地利用地方編1、古今書院）。
- 森田昶生（1966）、「畑地灌漑と畑地灌漑地域の発展」、地理科学5。
- 山川充夫（1979）、「愛知県渥美町の加工トマト生産」、地理学評論52
- 11。

Ⅳ - 1 地目別土地利用および農業経営の状況

		農家数	経営耕地面積				森林面積	工業用地面積	宅地面積
			総計	田	畑	樹園地			
田原町	1970年	戸 2697	ha 2791	ha 1164	ha 1325	ha 301	ha 2329	ha 23	ha 280
	1980年	2369	2374	904	1226	244	2245	336	690
赤羽根町	1970年	993	1025	416	603	6	696	×	66
	1980年	941	879	285	590	4	689	×	114
渥美町	1970年	3105	2982	1019	1927	36	2882	2	251
	1980年	2687	2876	735	2115	25	2838	×	355
南知多町	1970年	1605	1058	405	244	410	1647	1	161
	1980年	1051	749	292	117	340	1471	0	250
計	1970年	8400	7856	3004	4099	753	7554	26	758
	1980年	7048	6878	2216	4048	613	7243	336	1409

備考：農家数、経営耕地面積は1970年および1980年の農業センサスによる。森林面積、工業用地面積は愛知県企画部資料による。

1987年3月 印刷発行

愛知県土地分類基本調査

伊良湖岬

編集発行 愛知県企画部土地利用調整課
〒460 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

印刷 東洋地図株式会社
〒462 名古屋市北区猿投町38の3